

クザーヌスの『De dato patris luminum n. 100』 における物的な光, 色, 透明体について

—— ロバート・グローステストの『De luce』『Hexaëmeron』
『De colore』『De operationibus solis』における光, 色, 第一
質料, 透明体に照らして ——

高 岡 尚

『De dato patris luminum, n. 100』本文

— 『光, 色, 透明体の例』の記述部分 —

«Varia paradigmata nos ad huius iam dicti apprehensionem adiuvant. Nam lumen est forma quaedam universalis omnis esse visibilis, scilicet omnis coloris. Color enim est contracta receptio lucis, et non permiscetur lux rebus, sed recipitur descensive secundum gradum aliquem descensionis. Terminatio lucis in perspicuo est color, secundum unum modum rubeus, secundum alium blavius, et omne esse coloris datur per lucem descendentem, ut lux sit omne id quod est in omnibus coloribus cuius natura est se ipsam puriter diffundere ex bonitate sua. Et quamvis se ipsam puriter communicando donet, tamen ex varia receptione descensiva eius varietas colorum exsurgit. Nec est color lux, sed est lux sic recepta contracte tali quadam similitudine, ut se habet forma lucis ad formam colorum. Sic deus, lux infinita, ut forma universalis essendi se habet ad formas creaturarum.»

«さまざまな例が, さきにいわれたことを理解するためにわれわれを助ける。光はすべての可視的な存在の, すなわち, すべての色の或る普遍的な形相である。なぜなら, 色は光が縮限されて受容されることであり(その際) 光は事物に混じり合うことなく, むしろ, 下降の或る段階に基づいて下降的に受容されるからである。透明体における光の限界づけが色であり, それは(限界づきの) 或る仕方においては赤であり, (限界づきの) 他の仕方においては青である。そして色の存在はすべて下降する光によって与えられるので, その結果, 光は, ——自らの善性から自らを純粋に拡散せしめる本性をもつがゆえに—— 「すべての色において存在するところのもの」すべてであることになる。光は自らを純粋に伝達することによって与えるにもかかわらず, それがさまざまに下降的に受容されることから, もろもろの色という多様性が生じる。色は光ではないが, 光の形相がもろもろの色の形相に対して比をもつという或る類似によって, このように(下降的に) 縮限されて受容される光なのである。

同様に, 無限な光である神は, 「存在の普遍的な形相」としてもろもろの被造物の形相に対して比をもっている。⁽¹⁾»

緒 論

クザーヌスの『De dato patris luminum, n. 100』⁽²⁾において, 『De dato patris luminum』全

体の中心的な概念である「無限なる一性、存在の普遍的な形相、そして、それらの被造物への下降縮限」*unitas infinita, forma universalis essendi, descensus, contractio*⁽³⁾を説明するために、「物体的な光 *lux*, 色 *color*, 透明体 *perspicuum*, の例」(以下、『n. 100』と略称)が述べられている。

しかし、『n. 100』において「透明体」*perspicuum* 概念の具体的な特定がなされていない。そのため、「透明体」*perspicuum* についてはもとより、『n. 100』の内容そのものである「色の普遍的な形相である光」*lux, forma universalis colorum*, 「光の色への縮限と下降」*contractio et descensus lucis ad colorem*, 「光が色へと縮限下降する際に光と混じり合うことがない、事物 *res* と呼ばれるもの」*res, quibus lux non permiscetur*, 「色」*colores*, などの主要概念について、および、これらの概念相互間の機能的な連関についても、具体的に特定することが出来ない。したがって、「透明体」*perspicuum* 概念の特定なしには『n. 100』全体の理解が不可能である。

それゆえ、筆者は『n. 100』自体、そして『n. 100』がその一節として含まれている『*De dato patris luminum*』、また『*De coniecturis*』『*De quaerendo deum*』『*Compendium*』において「透明体」概念を可能な限り特定するべく努める。しかし、なおかつ不明のままに残る諸点については、13世紀の神学者ロバート・グローステスト Robert Grosseteste (1175-1253) の著作『*De luce*』『*De colore*』『*Haexaëmeron*』『*De operationibus solis*』において特定を試みたい。

第1章 クザーヌスの「物体的な光、色、透明体」について

1. 『n. 100』における「透明体」概念の位置

「透明体」概念の理解が『n. 100』の全体的な理解の前提となる。

なぜなら、(i) 『n. 100』の例において、「色の普遍的な形相である光」は「透明体における光」として述べられ、また、(ii) 「色の普遍的な形相としての光の下降縮限、限界づけ」はすべて「透明体における下降縮限、限界づけ」として述べられ、(iii) そして、また、クザーヌスの他の著作に明らかであるが、光の下降縮限が存在するためには、光のほかに、「光の下降縮限を可能ならしめ、そして、下降縮限の可能性の範囲を制限する或るもの」が存在し、しかも、それは「透明体の中に存在する或るもの」として理解されねばならない、からである。⁽⁴⁾

それゆえ、最初に「透明体」概念が特定され、それに伴って、「光」「色」「光の透明体における下降縮限」の概念も特定されて、『n. 100』全体の意味が明らかとなるのである。

2. 『n. 100』における「透明体」概念それ自体について

『n. 100』の「色の普遍的な形相である光」は『*De quaerendo deum*』、『*De dato patris luminum*』によると「虹を形成する太陽の光」⁽⁵⁾「木の成長の力の根源である太陽の光」⁽⁶⁾と同一物である。また、そればかりではなく、「創造の最初に神によって造られ、霊と物体の中間の本性を有し、また、物体がそれを分有することによって物体となり、物体がそれを分有する度合いが大であるだけその物体は物体としての完成が大となり、四大元素の本質もそれを分有する度合いの大きさに応じて決定される、というその物体性」⁽⁷⁾でもある。

また、『*Compendium*』においては「光を欠くことがないもの」と定義された「物体」が述べられている。⁽⁸⁾

それゆえ、『n. 100』における「色の普遍的な形相である光」は「物体の第一形相である光」でもある。

また、その光の分有を自らの本質的な完全性とする「物体」は、『*De quaerendo deum*』

『Compendium』『n. 100』などにおいて、或る場合に「透明体」⁽⁹⁾と呼ばれる。それは、アリストテレスが物体について「すべての物体は光という状態を含みもつ限り、含みもつその程度に応じて、より多くまたはより少なく透明という性質をもつ」と述べるころ⁽¹⁰⁾と同じである。

したがって、『n. 100』における「透明体」は、創造の最初に、「原初の光」の分有によって存在へと進み出た「物体」について言われる別の呼び方なのである。

3. 『De coniecturis』『De querendo deum』『Compendium』『De dato patris luminum』『n. 100』

に見られる、「透明体」に関するより詳細な説明について

以上見たところでは、透明体を「光を分有するもの」とする説明を見いだすことはできる。しかし、「光を分有すること」について、さらに具体的な説明をそこに見ることが出来ない。だが、同じこの諸著作中に透明体のより詳細な構造を知る手がかりを見出すことは不可能でない。

すなわち

(1) これらの諸著は、色を「透明体における光の限界づけ」⁽¹¹⁾と定義し、そして物体を「光を欠くことが無いもの」⁽¹²⁾と定義する。

これは、すなわち、クザーヌスが

i. 創造の始めに光を分有することによって存在し始めた「透明体」は、光を分有するところの、しかし光とは区別されるところのものである、

ii. そして、その「透明体」の中には光が純粋な存在の仕方含まれている、

iii. 「光を純粋な仕方自分の中に有するもの」であり、なおかつ、「光とは区別されたもの」である「透明体」の中には、「透明体」の構成要素として「光」のほかに「光とは本質を異にする或る何物か」も共に存在する、と考えていたことを示す。

(2) 『n. 100』および『De quaerendo deum』において、クザーヌスは「色の発生」を「光は事物 res に混じり合うことなく色へと限界づけられる」⁽¹³⁾と説明する。この説明に出てくる「事物」res は、上述 (1) iii. の「光とともに透明体の中であって透明体を構成する要素でありながら、光とは本質を異にする或る何物か」と同一のものである。

すなわち、この「事物」res は、res というラテン語からして、一見、「物体」一般、あるいは、光が限界づけられる際にそこに関わり合う或る特定の「物体」であるようにも思われる。しかし、実は、そうではない。なぜなら、この「事物 res に混じり合うことなく限界づけられる光」は色の定義において言われる光であり、それゆえ、「すでに透明体の中すなわち物体の中に在る」という限定的な意味を帯びた光である。それゆえ、この「色へと下降縮限する光が色への縮限の際に混じり合わない事物 res」は、「透明体」すなわち「物体」ではなく、「透明体すなわち物体の中にこの光とともに在り、透明体すなわち物体を構成し、光とは本質を異にする或る何物か」についていわれる概念なのである。

しかし、この「事物」res が具体的に何であるかという特定をわれわれは、『De coniecturis』『Compendium』『De quaerendo deum』『n. 100』『De dato patris luminum』において見出すことは出来ない。

したがって、『De coniecturis』『Compendium』『De querendo deum』『n. 100』『De dato patris luminum』における「透明体」概念について、その分だけ不明な点が残るのである。

4. クザーヌスにおける、透明体内の「色の生成」について

(1) 「色の生成」は常に透明体の中で起こる。

クザーヌスの色の定義、「透明体における光の限界づけ」はくりかえし述べられるので、「色の生成」の場所は明らかである。⁽¹⁴⁾それゆえ、光が透明体に本来的に属する場合のみならず、太陽光線が湿った水蒸気に外から照らし与えられる場合⁽¹⁵⁾や、太陽光線が地の万物に外から与えられる場合においても、色の生成は常に透明体の中で起こる。

(2) 透明体における光は「色の普遍的な形相、一性」である。それゆえ、色の生成は光の本性の中で起こり、光の本性の中で経過し、光の本性の中で完結する過程である。

すなわち、『n. 100』においてクザーヌスは透明体内の光を、「色の普遍的な形相」「色へと下降縮限し限界づけられる或る普遍的な形相」として表わす。これは、クザーヌスが、光を「無限な一性の多性への下降活動の一環に参加する或る一性」とみなしているからにはほかならない。

したがって、光は、存在の普遍的な形相の「一性」を分有している或る「普遍的な一性」である。それゆえ、色の存在は「すべて下降する光によって与えられ」、その結果、光は、「すべての色の唯一の源泉」「すべての色を普遍的な仕方で保有するもの」「すべての色において存在するところのものすべてであるもの」であることになる。⁽¹⁶⁾

したがって、「色の生成」は、光の本性の中で起こり、光の本性の中で経過し、そして光の本性の中で完結する過程である。

(3) クザーヌスにおける、「光の縮限の質料」について。すなわち、「透明体の中に在り、光の下降縮限を可能にし、光の下降縮限に諸段階とさまざまな仕方を生ぜしめる要素」について。

光は自体的には「自己を純粹に伝達することによって与える本性」を有する。にもかかわらず、結果的に、光は透明体の中で「下降のさまざまな仕方において下降の諸段階に基づいて縮限されて」受容される。⁽¹⁷⁾それゆえ、透明体の中には、「光の下降縮限を可能にし、また、下降縮限にさまざまな段階の仕方を生ぜしめる、有体的な要素」が存在していると考えられなければならない。

『Compendium』は一般的な表現で、(i)「現実存在すべきものすべてが前提している——質料、可能性という名称でよばれていて——それなしには現実存在すべきものが存在し得ない何か」が在ること、また、(ii)その「質料、可能性」は、その「現実存在すべきもの」の自然本性に属してもいないし、自然本性の根源でもないこと、また、逆に、(iii)「現実存在すべきもの」はその「質料となるべきもの自然本性」に属してもいないこと、を述べている。⁽¹⁸⁾

しかし、『De coniecturis』『De quaerendo deum』『Compendium』『De dato patris luminum』『n. 100』において、「光の下降縮限とその段階的受容を可能ならしめる質料」を具体的に特定する表現を見出すことができない。したがって、『n. 100』における「透明体」の具体的な意味は不明のまま残る。その結果、『n. 100』における「光の色への下降と縮限」の記述の完全な解明も実現しない。

5. 第1章のまとめ

こうして、

(1)

—「透明体の中に光と共に存在し、透明体を光から区別させる要素」 第1章 3. (1), iii,

—「光と共に透明体の中に存在し、色の生成にあたって光と混じり合うことがない、事物 res と呼ばれているもの」 第1章 3. (2),

—「透明体の中に存在し、光の下降縮限の質料となる或るもの」 第1章 4. (3),

この三点が、クザーヌスの『De coniecturis』『Compendium』『De quaerendo deum』『De dato patris luminum』の中では特定されないままに残されていること、

(2)

そして、これら三点が不明であるために、『n. 100』の「透明体」概念、「透明体における光の色への下降と縮限」概念が特定され得ぬまま残されること、が明らかとなる。

第2章 グローステストの『De luce』『Hexaëmeron』『De colore』『De operationibus solis』における、「光, 第一質料, 透明体, 物体, 色」の概念について

——すなわち、クザヌスに見られた上述の三つの不明点（第1章 3. (1), iii, 第1章 3. (2), 第1章 4. (3)）の特定に有効と思われる概念について

『De Luce』『De Colore』『De Operationibus Solis』の全般にわたり、また『Hexaëmeron』の一部において、グローステストの光学的物体世界生成論と色の理論のほぼ全容を見ることができ（¹⁹）。

すなわち、そこにおいて、

1) 創造の最初、神に造られ⁽²⁰⁾、「霊と物体の中間」の本性を有し⁽²¹⁾、「それをより多く含む物体が物体としての完全性をそれだけより多く有するというその物体性」corporeitasであり、また、それゆえに「物的な第一形相」forma prima corporalisである⁽²²⁾ところの、

「光」lux, lumen

2) 光を第一形相として分有することによって存在へと進み出るが、本質において光自体とは区別されるところの、

「透明体といわれる物体」perspicuum⁽²³⁾

3) 透明体の中で光が有体化することによって生成するところの、

「色」color⁽²⁴⁾

についての記述を見ることができる。

この記述は、クザヌスが「光」「透明体といわれる物体」「色」の起源、本性、作用について行なった説明とまったく同一の内容を有する。

したがって、グローステストとクザヌスの物体世界についての見解が基本的に同一であると考えられてよい。

しかも、その上、グローステストのこの四著作における物体生成論は、クザヌスの『De coniecturis』『Compendium』『De querendo deum』『De dato patris luminum』『n. 100』における「透明体」に関する三つの不明点（本論稿、第1章 3. (1), iii；第1章 3. (2)；第1章 4. (3)）を極めて具体的に特定する。

1. 天地創造における物体世界（透明体）の生成の過程について。および、生成したその物体世界（透明体）の構造について

(1) 「創造の最初の三日間」について、すなわち「世界の機械」といわれる「同芯の十三個の天体」の形成について

i. 「物体の第一形相である光」と「第一質料」

『創世記』本文第一章一節以下に出る「光」luxはグローステストによれば「物体性あるいは物体の第一形相」corporeitas, prima substantia corporisである。また、同じ『創世記』本文の「陸」terra, 「水」aqua, 「淵」abyssumは「物体生成のための第一質料」materia informis primaである。そして、それぞれが「実体 substantiaであり、単純 simplexな点であるもの」

として「時の初めに」in initio temporis 創造された。

その「光」すなわち「物体性」は、自体的には「存在したその瞬間から、あらゆる方角へと均等に自己増殖し、一瞬にして限りなく大きい球を形成する」という本性を有する〔図1〕。しかし、光が神によって創造されるとき、「淵」「水」すなわち「第一質料」も光とともに創造され、光と第一質料は相互に不可離の「形相と質料」の関係において創造された。この二者の相互の不可離の関係に起因して、光の拡散によって形成される球の大きさは、事実上、有限となった⁽²⁵⁾。

一方、「第一質料」は自体的に単純であり、縦横高さの広がりをも有しない。しかし、光の点があらゆる方角へと均等に自己増殖する

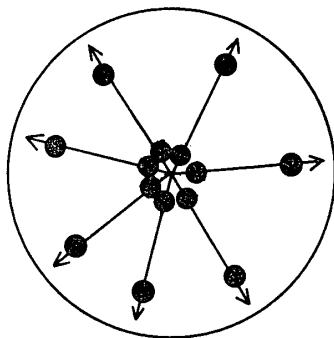
とき、光と不可離の関係にある第一質料は、それに伴って同じく拡散させられ、「単純なものが無限回多重化される時に服する数学的な原則」にしたがって、有限な量を有する「量的なもの moles という原子」となる。しかし、この過程においても、光自体の本性は終始不変である。⁽²⁶⁾

この「自らの本性にしたがって限りなくあらゆる方角に拡散しようとする光（物体の第一形相）」と「第一質料、または、光の限りない拡散によって量的なもの moles の原子となった第一質料」、この二つのものの本性は、その後の物体世界の生成過程においても、また、物体世界が完成された後においても、一貫して不変である。それゆえ、この二つが互いに混合し合って、「光」が「光ではない何か」に、あるいは「量的なものとなった第一質料」が「量的なものとなった第一質料ではない何か」に変化することはない。

こうして、「同芯の十三個の天球」すなわち「世界の機械」、そして「地に住むものどもの形態」はすべて、「光」と「量的なもの moles の原子となった第一質料」の二要素によって構成されることとなる。⁽²⁷⁾

ii. 「光」と「量的なもの moles の原子となった第一質料」の二要素による、「第一の球」から「月の球」までの九個の天球の形成について

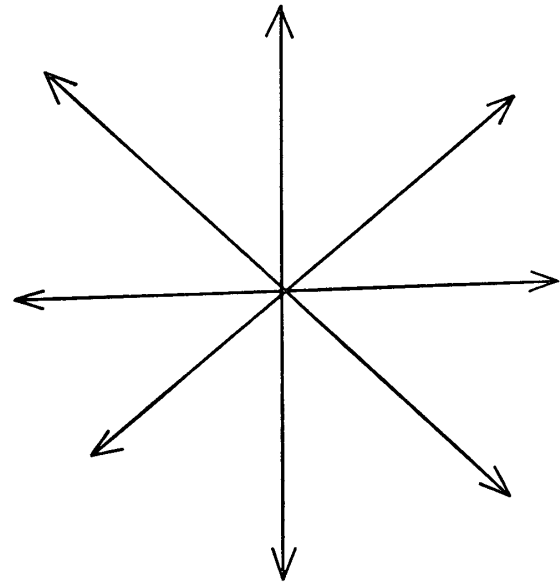
光がその起点からあらゆる方角へ等しく、球形に、限りなく自分を多重化し拡散しようとするとき、その光の自己拡散に伴って拡散する「量的なもの moles の原子となった第一質料」の量は、拡散の必然性に基づき、拡散の最も外側において最も希薄となる〔図2〕。そして、「量的なもの



〔図2〕

的なもの原子となった第一質料」の量が最も希薄になったその場所が、「量的なもの原子となった第一質料」に不可離な仕方で結びつけられている「光」の自己多重化と自己拡散の可能性の限界域ともなる。そこにおいて、外に向かう光の自己多重化と自己拡散は止まり、「世界の機械」mundi machina 大の球が形成される。⁽²⁸⁾

こうして形成された「世界の機械」mundi machina の球の内部には、「量的なものとなった第一質料」が、中心に最も近い部分において最も濃密であり、外側に近づくにつれて希薄となり、最も外側において希薄性は極限に達している、

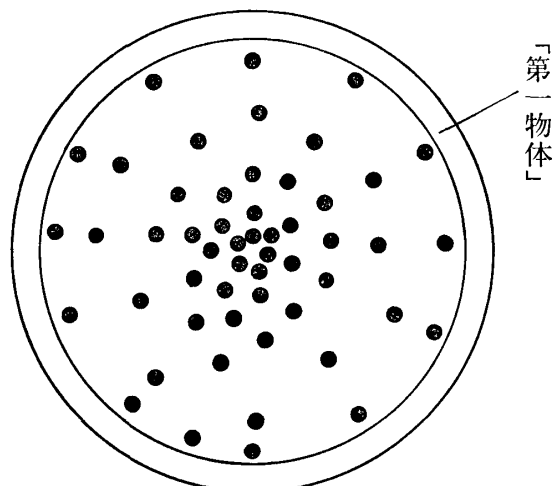


〔図1〕

という仕方で，分布している〔図3〕。

それゆえ，「世界の機械」の最も外側の部分は「光，すなわち物体の第一形相」と「極限まで希薄化されて量性を失った第一質料」によってのみ構成される。それゆえ，その部分は「第一形相である光」を最大度に所有することになる。そのために，その部分は「広がりをもつが，その単純性 *simplicitas* のゆえに靈に極めて類似した本性」を有する。これが「第一の物体」*corpus primum* である。

「第一の物体」は「量的なもの」を全く有さず，光（＝物体性）を最大度に有する。また，それゆえに不変性 *immutabilitas* をも有する。なぜなら，変化とは，「量的なものの原子となった質料が存在して，それらが光の押し下げを受容して移動すること」だからである。それゆえ，「第一の物体」は最も完成された物体である。⁽²⁹⁾



〔図3〕

次に，「限りなく自己を拡散する本性を有する光」は，第一物体の中心側の壁面のあらゆる部分から「世界の機械」の中心へ向けて，一瞬のうちに直線的に自己多重化を行なう。その際，光は，「第一物体の中心側の壁面から天球の中心に向けて分布し，天球の中心に近いほど濃密であるという在り方で分布している量的なものとなった第一質料」を，「世界の機械」の中心へ向けて，完全に払拭する仕方で一八段階ずつに仕切る仕方で一押し戻した。その結果，「世界の機械」の最も外側から内側にかけて，その「量的なものとなった第一質料」が一八段階ずつに区切られる仕方で一払拭される。そして，「量的なものとなった第一質料」が払拭されたその部分に，第一の物体を含めて同芯の九個の天球が形成された。

その過程において第一の物体に続いて形成されたこの八個の天球どもは，「物体性であるところの光」と「量的な原子を完全に除かれており，それゆえ，完全に希薄化されている第一質料」の二要素によって構成されている。それゆえ，この八個の天球どもは単純性 *simplicitas* と不変性 *immutabilitas* を有する。

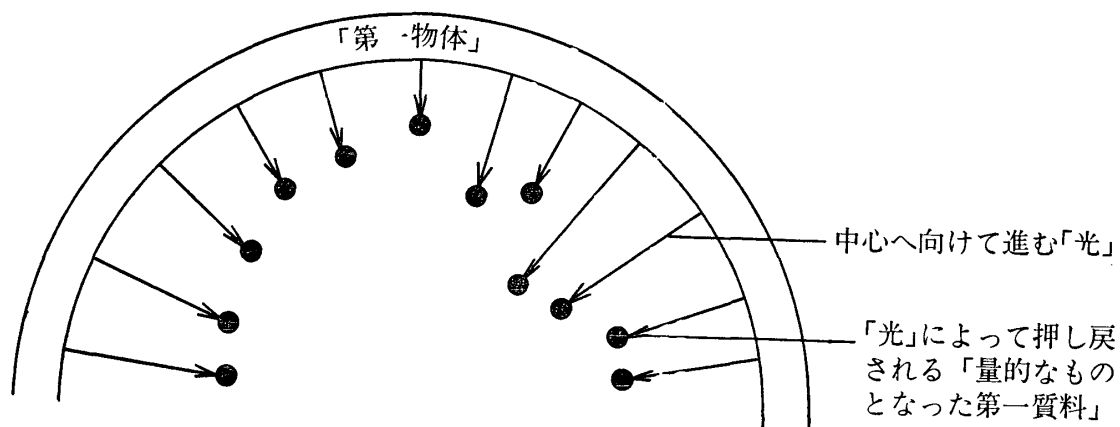
しかし，その第一の物体に続く八個の天球どもの中の光は，下位の天球におけるものほど力が少ない。それは，天球の中心へと押し戻されながら次第に濃密性を増す「量的なものとなった第一質料」を払拭し押し戻す過程において，光の力が減衰させられるからである。

こうして形成された九個の天球の最も下位の第九番目の天球は，「月の球」ともいわれる。

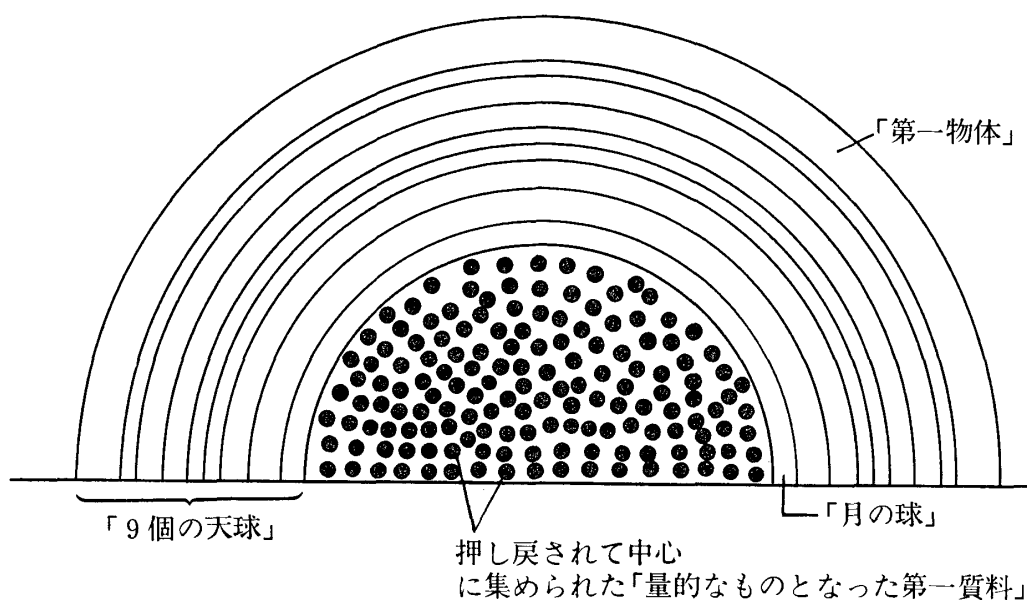
その結果，これら九個の天球に取り囲まれた「世界の機械」の中央の部分には，光によって中心に向けて押し戻されてきた「量的なものとなった第一質料」のすべてが，それだけ一層濃密に圧縮される仕方で存在する。⁽³⁰⁾〔図4〕，〔図5〕

iii. 「月下の四個の球体ども」の形成について

月の球もまた自らの光を「世界の機械」の中心に向けて拡散する。しかし，「月の球の一『世界の機械の中心』に面した一壁面」と「世界の機械の中心」との間に分布している「量的なもの *moles* の原子となった質料」の濃度はあまりに大であった。また，月の球の光は，「量的なものとなった第一質料」を中心に向けて「完全に」払拭しながら，「量的なものとなった第一質料を全く含まないもう一つの天球」を「月の球」の中心側の壁面に隣接して造り出すには，すでに力が減衰していた。そのため，「月の球」の中心側の壁面に隣接して出来た「第十の天球」



【図4】



【図5】

は、「量的なものとなった第一質料」を幾分自らの内に残留させる仕方で完成した。これが「元素としての火の天球」である。

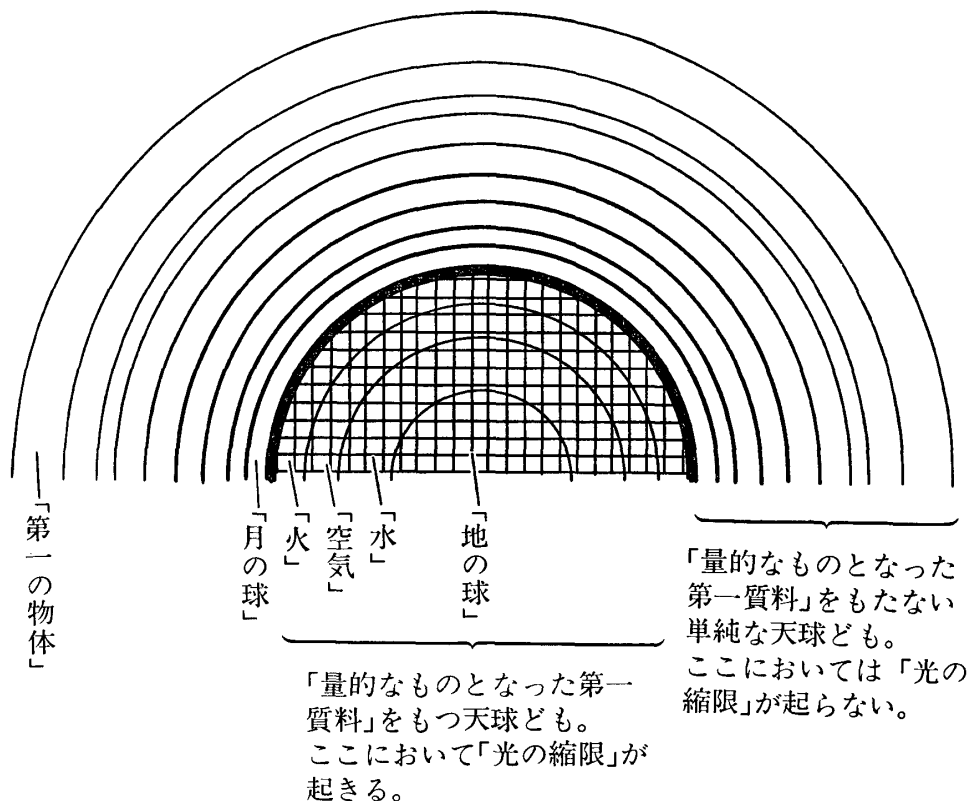
「火の天球」から「世界の機械」の中心へ向けて発せられた光は、「量的なものとなった第一質料」を更に中心へと押し戻しながら、「火の天球」の中心側の壁面から順次隣接するかたちで「空気の球」「水の球」「大地の球」を完成させる。

これら三個の天球は「空気」「水」「大地」の順でより弱められた「光」を有し、また、同じ順でより濃密化された「量的なものとなった第一質料」を有する。そして、「世界の機械」の中心に位置する「大地の球」において、光は最も弱められ、「量的なものとなった第一質料」は最も濃密化されている。

「世界の機械」「十三個の天球」はこうして完成された。⁽³¹⁾ [図6]

(2) 「創造の第四日目」について。そして、それ以降の物体世界の形成過程についてこの点は『Hexaëmeron』『De operationibus solis』に詳しく述べられている。

i. 太陽が創造されたこと、および、「創造の最初に造られた光」が太陽にゆだねられたこと。第四日目に「光体ども」luminaria が造られ、その中の太陽に「最初に造られた光、物体の



〔図6〕

第一形相」がゆだねられる。その結果、「地」と「地にあるもの」に対しては、太陽が「光，物体の第一形相」の源泉となる。⁽³²⁾

ii. 「地に住むものどもの形態」という透明体の生成について

神が創造した「地に住むものども」の「目に見えぬ本性」に、太陽は自らにゆだねられた「最初に造られた光，物体の第一形相」を注ぎ与える。そうすることによって、太陽は、それら「地に住むものども」の「目に見えぬ本性」に、縦横高さの広がりすなわち「目に見える形態」を与える。その「目に見える形態」は、「太陽から注がれた光，物体の第一形相」と「量的なものども moles の原子となった第一質料」の組み合わせから成る物体であり透明体である。これが「大地に住むものども」すべての形成の本質的な点である。⁽³³⁾

こうして、「光，すなわち物体の第一形相」と「量的なものどもの原子となった第一質料」によって構成される物体世界（＝透明体）の生成，すなわち、「世界の機械」と「地に住むものどもの形態」の生成はすべて完成する。

2. 色の生成について

「色の生成」の基本原理は『De colore』に示されており、また、「物体世界における色の具体的な生成過程」は『De luce』『Hexaëmeron』『De operationibus solis』において明かにされる。

(1) 色が生成する場所

色の生成は「湿った透明体における光の物体化」 *incorporatio lucis in perspicuo humido* と定義される。すなわち、色の生成の場所はただひとつ「透明体（物体）」に限定されている。⁽³⁴⁾

(2) 色の生成の基本原則

透明体における (i) 光の多さ、(ii) 光の明るさ、(iii) 透明体の透明性の純度、この三つが色

の生成の三要素である。

すなわち、(i) 光の多さ、(ii) 光の明るさ、(iii) 透明体の透明性の純度、のすべてが最大であれば、その透明体において「白」が生成し、また、(i) 光の多さ、(ii) 光の明るさ、(iii) 透明体の透明性の純度、のすべてが最小であれば、その透明体において黒色が生成する。

そして、これら三要素のそれぞれの増大減衰の各組み合わせと、それら増大減衰の無限に考えうる度合いに対応する各組み合わせに応じて、無限に各色が生成する。⁽³⁵⁾

(3) 物体世界の生成過程における色の生成の具体的な過程

「世界の機械」の創造は、「光」と「第一質料」の創造から始まる。

光はその本性からして、創造された瞬間、起点から自分を限りなく自己増殖しつつ、「自分のすべてを純粋に」世界の機械のために与える。しかし、世界の機械は光の「無限な拡散」および「完全な多さと明るさ」を、自分の第一質料が「受け入れうる限りにおいて」受け入れる。

その結果、(i) 「光の無限な拡散」は「世界の機械という有限な大きさの天球」という在り方において、

(ii) 「光の単純性と完全な強さ」は、「単純性の喪失と強さの減衰、すなわち、色」という在り方において、

受け入れられる。

そして、この「色の生成」が起こるのは、「第十の天球」から「第十三の天球」の形成過程において、および「地に住むものども」の形成過程においてである。

すなわち、第一から第九の天球どもを形成する過程において、すでに、光は、次第に密度を増す「量的なものの原子となった第一質料」を中心へと押し戻したことによって、その強さを減衰させている。その上、第十から第十三の天球どもの形成および「地に住むものども」の形成においては、それら透明体に残存する「量的なものとなった第一質料」によって「光の多さと明るさ」が減衰させられた上、さらに「透明体の透明性」も減衰する。そこに、色が生成する。⁽³⁶⁾ [図6]

(4) 光と色とは本性において同一であること

色の生成は、「光の本性の内部で、光の本性の同一性を損ねることなく」起こる。すなわち、

(i) 『De luce』によれば、完成された「世界の機械」の月下界における「変化」はすべて、新たに光の押し広げを受け入れる可能性を有する「量的なもの moles の原子となった第一質料」が、光の新たな押し広げを受け入れて場所的に移動することである。それゆえ、「世界の機械」におけるあらゆる変化の下で、「光」と「量的なものの原子となった第一質料」の二要素の本性は常に不変不動で共通の基本要素として存在し続けるものである。それゆえ、物体世界において、「光」と「量的なもの moles の原子となった第一質料」の二存在が相互に混じり合うことによって「光でもなく、量的なものの原子となった第一質料でもない、第三の存在」が生成することは、あり得ない。⁽³⁷⁾

(ii) また、『De operationibus solis』によれば、視 visus が可能なのは、光の本性と色の本性が同一であるからである。すなわち、グローステストにとって「色」は本性においては「光そのもの」なのである。⁽³⁸⁾

(5) そして、グローステストは、以上の(1)~(4)の文脈において、色の生成の核心部分を「色は光の物体化である。」 incorporatio lucis と定義する。

光は本来、単純性 *simplicitas* を有する。が、色とは、「光が自らの本性を保有しながら、その単純性 *simplicitas* を喪失すること」である。すなわち、「非場所的なもの」である光が、光で在り続けながら「広がりをもつもの・場所的なもの」になることである。⁽³⁹⁾

第3章 む す び

クザーヌスの『De dato patris luminum. n. 100』そして『De dato patris luminum 全文』『De coniecturis』『Compendium』『De querendo deum』と、グローステストの『De luce』『Hexaëmeron』『De colore』『De operationibus solis』とを併せ読むことによって、次のことが明らかになった。

1. クザーヌスにおいては、

i. 「透明体（物体）の中に光とともに存在し、光とともに透明体の構成要素でありながら光とは本質を異にし、それゆえ、透明体（物体）を『物体の第一形相である光』から区別させているもの」

ii. 「透明体（物体）の中に存在し、光の下降縮限すなわち色の生成、の質料となるもの」

iii. 「透明体（物体）の中に存在し、光が下降縮限する際に、光が混じり合うことが無いものであり、事物 *res*、と言い表わされているもの」

以上の三つのものが存在するということが明記されているが、それら三つのものの本質を具体的に特定する記述は見出されなかった。

グローステストはクザーヌスと一致して、同じ三つのものを「存在するもの」として挙げる。が、さらに進めて、その三つのものを「量的なものの原子 *moles* となった第一質料」として特定している。それは、

イ) 「時の初め」に、「光」とともに、「光と不可離な関係にある単純な点」として創造され、

ロ) その「光」の点の無限回自己多重化に伴って、「単純なものの無限回多重化は、その単純なものを有限な量的なものに変える」という数学的幾何学的公理に従って、無限回多重化され、その結果、有限な量の「量的なもの *moles* の原子」となった、

「第一質料」

である。

2. また、クザーヌスにおいては「創造の際、光を第一の形相として分有することによって形成され、そして、光の分有の度合いがより高ければそれに応じてより完成されたものとなり、しかし、それにもかかわらず光とは区別されている、透明体（物体）といわれるもの」が述べられる。しかし、その透明体（物体）の全体構造を明らかにする説明がそこには欠けている。

グローステストは、クザーヌスと同じ透明体（物体）を考えながら、上の1の「第一質料」の特定を踏まえつつ、「透明体（物体）は光および量的なものの原子となった第一質料の二要素から成るものである」という完成された特定をおこなっている。

3. また、クザーヌスは「透明体の中に存在している、光の下降縮限のための質料」に言い及んでいるが、それが、物体世界の構造において具体的に何に当たるかを説明していない。

グローステストは、クザーヌスとともに「透明体の中に存在している、光の下降縮限のための質料」の存在を認めながら、さらにそれを次の様に、より具体的に説明する。

イ) 「物体世界」の創造過程において、「世界の機械」大の球が形成されたとき、その球の内には「量的なものの原子となった第一質料」があまねく分布していた。その「量的なものの原子となった第一質料」は、第一物体から中心へ向けて反射する光に押されて、第十から第十三の天球の中に閉じ込められた。

ロ) その「量的なものの原子となった第一質料」は、第十から第十三の天球それぞれの中において、下位の天球におけるほどそれだけ濃密に存在し、「地の球に住むものども」の形態の中にも存在する。そして、第十から第十三の天球の中と「地の球にすむものども」の形態の中において、光の在り方に制約を与え、光の縮限の条件となる。

4. クザーヌスは「光の下降縮限」を、「透明体において自らのすべてを純粹に与える光が、『光の受容の質料となるもの』の条件づけの影響下に限界づけられて色となること。」と定義づける。しかし、「限界づけられること」ということが物体世界において具体的に何を指すのかを説明していない。

グローステストは、その「限界づけられること」を、上の 1. 2. 3. の特定を踏まえて、

(イ) 透明体の中に在る光が、透明体の中に在るもう一つの要素である「量的なものの原子となった第一質料」によって、その本質こそ変えられることは無いものの、その強さ、多さを減衰させられること、

(ロ) さらに、「量的なものとなった第一質料」によって透明体自体の透明性が減衰すること、

(ハ) その結果、光はその本来の在り方である単純性を失い、場所性を帯びた存在となること、と特定する。

5. グローステストによる、上の 1 から 4 までの四つの特定は、クザーヌスの物体世界の説明における空白部分を個々に完全に補充する。しかも、補充されたその部分は、『De coniecturis』『De querendo deum』『Compendium』『De dato patris luminum』のそこそこに断片として散在するに過ぎないクザーヌスの「物的世界に関する言及」を統合し、統一性、整合性を帯びた一個の完成された物体世界像として呈示しなおす力を有するにいたる。

そして同時にわれわれは、『n. 100』について、筋道の通った、無理のない、ひとつの読み方を得るのである。

完

注

(1) — Nicolaus de Cusa, *De dato patris luminum* (以下, *De dato.*) II, n. 100. "NICOLAI DE CUSA OPERA OMNIA, iussu et auctoritate Academiae Litterarum Heidelbergensis ad codicum fidem edita, IV : OPUSCULA I, edidit Paulus Wilpert, Hamburgi in Aedibus Felicis Meiner 1959" pp. 74-71. (拙訳『ニコラウス・クザーヌス もろもろの光の父の贈物』札幌大学女子短期大学「紀要」第七号, 1986, 64頁。)

(2) — *ibid.* 同上。

(3) — *ibid.* 例えば, II, n. 97. - n. 99.

(4) — *Compendium* (以下, *Comp.*) VII, n. 19. "NICOLAI DE CUSA Compendium Bruno Decker und Karl Bormann, PHILOSOPHISCHE BIBLIOTHEK FELIX MEINER HAMBURG. 1982."

«Aër autem ut aër nullo sensu attingitur. Visus enim non videt aërem, sed aërem coloratum, uti experimur radio solis coloratum vitrum penetrante aërem coloratum videri. (中略). Aër igitur ut aër nullo sensu attingitur, sed per accidens venit in notitiam sensitivam. Adeo tamen est necessarius auditui, quod sine ipso nihil audibile fieri potest. Oportet igitur, ut similiter consideres omne, quod actu esse debet, sive sensibile sive intelligibile, praesupponere aliquid, sine quo non est; quod per se nec est sensibile nec intelligibile. Et quia illud forma sensibili aut intelligibili caret, nosci nequit, nisi formetur, et non habet nomen. Dicitur tamen hyle, materia, chaos, possibilitas sive posse fieri seu

subiectum et aliis nominibus. >

◀空気は、空気である限り、どの感覚によっても到達されない。すなわち、視覚は空気をではなく、「色づいた空気」を見る。たとえば、太陽の光線が色ガラスを通して通過するとき、「色づいた空気」が見られることをわれわれが経験するようである。(中略) それゆえ、空気は、空気であるかぎり、どの感覚によっても到達されないが、「付带的には」per accidens 感覚的な知 notitia sensitiva へと入って来る。(中略) それゆえ、同様にあなたはこう考察すべきである、すなわち、「可感的なもの」sensibile であれ「可知的なもの」intelligibile であれ、現実存在すべきものはどれも、「それなしにはこれ(現実存在すべきもののすべて)が存在しない何か aliquid, sine quo non est — 「自体的には」per se 「可感的なもの」でもなく「可知的なもの」でも無いもの——を前提している、と。そして、これ(現実存在すべきものすべてが、それなしには存在しないその何か)が「可感的な形相」forma sensibilis あるいは「可知的な形相」forma intelligibilis を欠いているがゆえに、形相を与えられなければ nisi formetur, 知られ得ないし、名称を所有しない。しかし、これは、ヒューレー hyle, 質料 materia, 混沌 chaos, 可能性 possibilitas, あるいは、被成可能 posse fieri ないしは基体 subjectum, および、その他の名称によって呼ばれている。> (大出哲・野沢建彦訳『神学入門』1987)

— *ibid.* VII, n. 20.

◀Deinde attendendum quod, licet sine aëre non fiat sensibilis sonus, non tamen est aër de natura soni, sic nec hyle de natura est cuiuscumque formae, nec est principium eius, sed principium eius formator existit. Quamvis igitur sonus sine aëre fieri nequeat, non est propterea de natura aëris. >

◀つぎに、空気なしには可感的な音 sensibilis sonus は生じないけれども、空気は「音の自然本性」natura soni に属してもいないし——ちょうど、ヒューレーが何であれ形相の自然本性に属していないようである——また、それ(「音の自然本性」)の根源でもない、むしろ、それ(「音の自然本性」)の根源は形成者 formator である、ということが注目されるべきである。それゆえ、音は空気なしには生じ得ないけれども、それだからといって音は空気自然本性 natura aëris に属しているわけではない。> (大出・野沢訳『神学入門』1987)

- (5) — Nicolai de Cusa *De quaerendo deum* (以下, *De quer.*) II, n. 34. NICOLAI DE CUSA OPERA OMNIA, 注(1)に同じ。p. 24.

◀Color autem in lumine non est ut in alio, sed ut in principio suo, quoniam non est color nisi terminus lucis in diaphano, ut in iride experimur. Secundum enim quod radius solis in nube aquosa aliter et aliter terminatur, alius et alius generatur color. Unde manifestum est colorem in suo principio, scilicet in luce, visibilem, quoniam lux extrinseca et spiritus visivus in claritate communicant. >

◀ところで、色が光のなかに存するのは、いわば他なもの(色とは別なもの)のうちにはなくて、いわばみずからの始源のうち存することなのである。なぜなら、色は、われわれが虹において経験するように、透明体における光の限界づけにほかならないからである。というのは、太陽の光線が水っぽい雲のなかで別々に限界づけられることに基づいて、別々な色が生み出されるからである。したがって、色がみずからの根源において、すなわち、光において可視的になることは明かである。> (大出 哲訳『神の探究について』「隠れたる神」大出、阪本、創文社、1971年、60頁。)

- (6) — *De dato.* I, n. 94.

◀Videmus quidem virtutem seminis datam a patre luminum, scilicet sole, non poni in actum, nisi donetur ab eodem. Non enim educitur de potentia seminis arbor nisi sole donante, cuius, etiam est datum, ut vis illa semini insit. >

◀じっさい、われわれは、「もろもろの光の父」から、つまり太陽から与えられた種子の力が、同じもの(もろもろの光の父である太陽)から(光という)贈り物が与えられる場合にかぎり現実態へともたらされる、ということを見る。というのは、木が種子という可能態から引き出されるのは、太陽が(光という)贈り物を贈る場合に限られるからである。あの力(木へと成り長する力)が種子に内在することも、太陽の贈り物なのである。> (拙訳、注(1))

に同じ。)

(7) — *De quaer.* II, n. 37.

«Advertendum igitur, quoniam mirabilis deus in operibus suis creavit deus lucem, quae simplicitate sua excellit cetera corporalia, ut sit medium inter spiritualem naturam et corporalem, per quam corporalis hic mundus tamquam per suum simplex ascendat in spiritualem mundum. (中略) Ita quidem et in esse prodiit mundus ipse, ut corporalis hic mundus participatione lucis hoc sit quod est, et tanto res corporales in genere corporeo perfectiores censeantur, quanto plus lucis participant, ut gradatim in elementis experimur.»

«そこで、注目すべきは、「その御業のゆえに驚嘆すべき神」である神が光を——その単純性によって他の物的なものどもを卓越する光を——創造したこと、(中略)このことである。(中略)じっさい、物的なこの世界が光の分有によって「現にあるところのもの」となるような仕方、世界そのものが存在へと進み出たのである。また、物的な諸事物は、いっそう多く光を分有すればするほど、物的な類のなかでいっそう完全なものとなされるが、これは、われわれがもろもろの元素に関して段階的に経験するとおりである。» (大出訳、注(5)に同じ。64~65頁。)

(8) — *Comp.* IV, n. 8.

«Considerans autem signa sensibilia quomodo ab objecto ad sensum perveniunt, reperiet res corporales splendescere actu aut habitu, actu ut lucida, potentia ut colorata. Neque aliqua res corporalis penitus est expers lucis aut coloris, qui ex luce est. Non tamen color, nisi luce iuvetur, splendorem per visum nostrum perceptibilem de se mittit.»

«ところで、「可感的なシルシ」が、どのようにして対象から感覚へと到達するかを考察する人は、物的なモノどもが、「現実、或いは、能力態的に」——光り輝いているものとしては「現実」、有色なものとしては「可能態的に」——輝いているのを見出すであろう。どの物的なモノも光を、或は、「光によって生じる色」を全く欠くことは無いのであって、色は、光に助けられるときのみ、我々の視覚によって感じとられる「輝き」を自分から発するのである。» (大出・野沢訳、注(4)に同じ。)

(9) — *Comp.* I, n. 2.

«Illa etiam, quae per ipsum cognoscuntur, signa sunt ipsius lucis. Colores enim, qui visu cognoscuntur, signa sunt et termini lucis in diaphano.»

«さらに、感覚的な視覚を介して認識されるものどもは、光そのもののシルシである。すなわち、視覚によって認識されるもろもろの色は「透明なものにおける光のシルシ」であり、「透明なものにおいて光が限界づけられたもの」である。» (大出、野沢訳、注(4)に同じ。)

— *De quaer.* II, n. 34

«Color autem in lumine non est ut in alio, sed ut in principio suo, quoniam non est color nisi terminus lucis in diaphano, ut in iride experimur.»

«なぜなら、色は、われわれが虹において経験するように、透明体における光の限界づけにほかならないからである。» (大出訳、注(5)に同じ。)

— *De dato.* II, n. 100,

«Terminatio lucis in perspicuo est color.»

«透明体における光の限界づけが色であり、……» (拙訳、注(1)に同じ。)

(10) — Aristoteles, *ΠΕΡΙ ΨΥΧΗΣ* B, 418, b 10-b 30.

«しかし「透明なもの」と私が呼ぶのは、見られるものではあるが、しかし簡単に言えば、「自体的に見られるもの」ではなくて、むしろ自分とは別のものに属する色を通じて見られるものことである。そして空気や水や固体の多くのものがこのような性質のものである。[何か透明なものがあると言うのは]なぜかというに、それらが透明であるのは水である限りででもなく、また空気である限りででもなく、この両者のうちには同一の或る本性が内在している——これはまた永遠な上方の物体のうちにもあるが——からなのである。そして光はこのもの、すなわち透明なものである限りでの透明なものの現実態である。しかしこの透明なものがただその可能態においてあるところに、闇もまたある。そして光はいわば透明なものの色のようなものである、ただしこう言うのは透明なものが火、あるいは上方の物体

のような性質のものによって現実態において透明である時のことである。(そして実際この上方の物体のうちには或る「火と」同じ一つのもので存しているのである。)

ところで透明なものが何であるか、また光が何であるかということはすでに語られた、すなわち光は火でもなく、また一般的に言って、物体でもなく、また何らかの物体の流出物でもない(なぜなら流出物だとしても、何か物体であるだろうから)、むしろ光は火、あるいは何かこのような性質のもの、透明なものにおける臨在である。というのは二つの物体は同時に同じところにあることはできないし、また光は闇に対して反対なものと思われているが、その闇は透明なものからの、(明るさを所有した)状態の喪失である、従ってまた光はこのような状態の臨在であるということは明かだからである。(中略)そして色を受け入れることのできるものは色のないものであり、音を受け入れることのできるものは音のないものである。しかし色のないものというのは透明なものや見られないもの、あるいはやっと見られるもの(闇的なものはこのようなものだと思われるが)である。そしてこの後のようなものであるのは、なるほど透明なものであるが、しかし現実態においてではなくて、むしろ可能態において透明である時の透明なものである。なぜなら同一の本性が或る時には闇であり、或る時には光であるのだから。》(山本光雄訳、『靈魂論』アリストテレス全集6, 61~62頁, 岩波書店, 1976.)

(11) — *Comp.* I, n. 2. 注(9)。

— *De quaer.* II, n. 34. 注(9)。

— *De dato.* II, n. 100. 注(9)。

(12) — *Comp.* IV. n. 8. 注(8)。

(13) — *De dato.* II, n. 100.

《Color enim est contracta receptio lucis, et non permiscetur lux rebus, sed recipitur descensive secundum gradum aliquem descensionis.》

《なぜなら、色は光が縮限されて受容されることであり、(その際)光は事物に混じり合うことなく、むしろ、下降の或る段階に基づいて下降的に受容されるからである。》(拙訳, 注(1))

(14) 注(1)。

(15) — *De quaer.* II, n. 34. 注(5)。

(16) — *De dato.* II, n. 100.

《Nam lumen est forma quaedam universalis omnis esse visibilis, scilicet omnis coloris. Color enim est contracta receptio lucis, …… (中略) sed (lux) recipitur descensive secundum gradum aliquem descensionis, (中略) et omne esse coloris datur per lucem descendentem, ut lux sit omne id quod est in omnibus coloribus, cuius natura est se ipsam puriter diffundere ex bonitate sua.》

《光はすべての可視的な存在の、すなわち、すべての色の或る普遍的な形相である。なぜなら、色は光が縮限されて受容されることであり、(中略)光は下降の或る段階に基づいて下降的に受容されるからである。(中略)そして、色の存在はすべて下降する光によって与えられるので、その結果、光は、自らの善性から自らを純粋に拡散せしめる本性をもつがゆえに、すべての色において存在するところのものすべてであることになる。》(拙訳, 注(1))

— *De coniecturis* (以下, *De con.*) II Cap. XVI. n. 161. “NICOLAI DE CUSA OPERA OMNIA III DE CONIECTURIS, IOSEPHUS KOCH et CAROLUS BORMANN, HAMBURG FELIX MEINER 1972.”

《Unde uti color non est visibilis nisi in unitate lucis, quia color lucis est alteritas, alteritas autem non nisi in unitate attingibilis est, ……》

《したがって、色が光という一性においてのみ見られうるように——なぜなら、色は光の他性であり、他性は一性においてのみ到達されうるのであるから、……》(大出 哲訳, 1967。)

— *De con.* II Cap. XVII. n. 172.

《Atque ut exemplo visibili iuveris, imagineris huius visibilis mundi simplicissimam unitatem incontrahibilem lucem esse, in cuius alteritate participationis visibilia omnia id sunt quod sunt. Color igitur huius lucis alterata exstat participatio. Sit igitur circulus

universi coloris ambitus. Color autem non nisi contracte exsistere potest, quoniam eius unitas ab absoluta ipsa cadens in alteritate contrahitur. >

《あなたは、視覚的な例によって助けられるために、こう表象されよ。すなわち、この見える世界の最も単純な一性が縮限されえない光であり、この縮限され得ない光を分有する他性において、見えるものすべてが、現にあるとおりのものとして存在する、と。それゆえ、色は、この光が他化されている分有として現存する。そこで、普通の円が色を包み囲んでいるとせよ。そうすると、色は、縮限された存在でしか現存し得ないことになる。なぜなら、色の絶対的な一性は、みずから転落して他性において縮限されるからである。》(大出訳、1967。)

(17) *De dato*. II, n. 100.

《Et quamvis lux se ipsum puriter communicando donet, tamen ex varia receptione descensiva eius varietas colorum exsurgit. >

《光は自らを純粹に伝達することによって与えるにもかかわらず、それがさまざまに下降的に受容されることから、もろもろの色という多様性が生じる。》(拙訳、注(1)。

(18) *Comp.* VII, n. 19; n. 20. 注(4)。

(19) (i) *De luce*; “Die philosophischen Werke des Robert Grosseteste, ed. BAUR (BGPM Bd. IX,) (Münster i. W., 1912)”, pp. 51-59.

(ii) *De colore*; 同上。pp. 78-79.

(iii) *Hexaëmeron* (以下 *Hex.*); “ROBERT GROSSETESTE, HEXAËMERON edit. RICHARD C. DAVIS and SERVUS GIEBEN O. F. M. Cap. (AUCTORES BRITANNICI MEDII AEVI OXFORD UNI. 1982)”

(iv) *De operationibus solis* (以下, *De oper. sol.*); ed. James McEvoy. (Rech. Théol. anc. méd. 41, 1974), pp. 62-91.

(20) — *Hex.* Part. 2, Cap. IV, 1.

《Itaque lux, que nunc facta dicitur secundum sensum primum literalem, ut supra dictum est, lux corporalis intelligitur, …… >

《それゆえ、上述の第一字義に基づいて今「造られた」(創世記における光)と言われている光は物體的な光であり、》(拙訳、未発表。)

— *ibid.* Part. 2, Cap. VIII, 2.

《Per lucem igitur conditam intelligitur primo sensu lux visibilis primos tres dies temporaliter peragens, …… >

《それゆえ、「創造された光」によって、第一義としては、最初の三日間を時間的に完成させた可視的な光が理解され……。》(拙訳、未発表。)

— *De luce* 52 : 17-21.

《Lux ergo, quae est prima forma in materia prima creata, (中略) materiam (中略), quanta est mundi machina, in principio temporis extendebat. >

《それゆえ、第一質料の中に創造された第一形相である光は、(中略) (第) 質料を自分と共に離散させながら、それを「世界という機械」が存在しうるだけの量にまで、時の始めにおいて広げたのである。》(拙訳、「グローステストの光概念に関する諸問題 II。“De luce seu de inchoatione formarum” 全訳」札幌大学女子短期大学「紀要」第4号(通巻24号)1984。)

(21) — *De luce* 52 : 10-15.

《Amplius : formam primam corporalem formis omnibus sequentibus digniorem et excellentioris et nobilioris essentiae et magis assimilatae formis stantibus separatis arbitrantur sapientes. Lux vero omnibus rebus corporalibus dignioris et nobilioris et excellentioris essentiae est, et magis omnibus corporibus assimilatur formis stantibus separatis, quae sunt intelligentiae. >

《その上、(1)「物體的な第一形相」は、それに続くすべての形相よりも優れている。(2) それは、(それに続くすべての形相よりも) より卓越したより高貴な本質を所有している。(3) それは、「分離して自存する諸形相」

に（それに続くすべての形相よりも）よりいっそう類似している，と賢者たちは言っている。しかるに，光は，物的なもののどもすべてよりもより優れた，より高貴な，より卓越した本質を所有しており，「知性実体という分離して自存する諸形相」にすべての物体よりもよりいっそう類似している。」（拙訳，札幌大学女子短期大学「紀要」第4号（通巻24号）1984. 注⑳に同じ。）

— *ibid.* Part. 2, Cap. X, 1.

◀Lux quoque secundum Augustinum est id quod in natura corporea est subtilissimum; et ob hoc anime, que simpliciter incorporea est, maxime vicinum. ▶

◀また，アウグスティヌスによれば，光は物的な本性において最も希薄なものである。それゆえ，単純に非物的である靈魂に最も近いものである。▶（拙訳，未発表。）

㉒ (イ) 物的な存在が存在するための直接の原因であり第一の形相である光について。

— *De luce* 51 : 10-23.

◀Formam primam corporalem, quam quidam corporeitatem vocant, lucem esse arbitror. (中略) Corporeitas vero est, quam de necessitate consequitur extensio materiae secundum tres dimensiones, ……▶

◀或る人々が「物性」と呼んでいるところの「物的な第一形相」は「光」である，と私は思う。(中略) 物性から必然的に「質料の三次元的な広がり」が結果するが，……▶（拙訳，1984，注㉒に同じ。）

— また，*De luce* 全体が，光を「単純性の世界と広がりを有する世界との媒介」そして「単純な世界から広がり・寸法を有する世界を出現させるモノ，そして，広がりを有する世界の唯一で第一の形相的要素であるモノ」として描いている。

(ロ) 「物体の完全性」である光について。

— *De luce* 56 : 14-21.

◀Hoc igitur modo productae sunt in esse sphaerae 13 mundi huius sensibilis : novem scilicet caelestes, inalterabiles, inaugmentabiles, ingenerabiles et incorruptibiles, utpote completae, et quattuor existentes modo contrario, alterabiles, augmentabiles, generabiles et corruptibiles, utpote incompletae. — Et patens est, quoniam omne corpus superius secundum lumen ex se progenitum est species et perfectio corporis sequentis. Et sicut unitas potentia est omnis numerus sequens, sic corpus primum multiplicatione sui luminis est omne corpus sequens. ▶

◀つまり，この仕方では，この可感的な世界の十三個の球が存在へと造り出された。それらはすなわち，(1) 完成されたものとして，変化しえないし，増大もしえないし，生成もしえないし，消滅もしえない九個の天球，および，(2) 未完成なものとして，（^{さきの九} _{個とは}）反対の仕方では存在するところの，変化しうるし，増大しうるし，生成しうるし，消滅しうる四つの球である。—そして，「自分から生み出される光」に基づいてより上位にある物体はすべて，後続する物体の種であり，それを完成するものであるということは明かである。また，可能性によって「1」が「後続するすべての数」であるのと同様に，自らの光の多重化によって第一物体は，後続するすべての物体である。▶（拙訳，1984. 注㉒に同じ。）

— *De luce* 56 : 36~57 : 1.

◀Et species et perfectio corporum omnium est lux : sed superiorum corporum magis spiritualis et simplex, inferiorum vero corporum magis corporalis et multiplicata. ▶

◀物体どもすべての種であり完全性であるものは光である。しかし，上位の物体どもの種であり完全性であるものは「より気息的で単純な光」であり，下位の物体どもの種であり完全性であるものは「より物的で多重化された光」である。▶（拙訳，1984. 同上。）

㉓ *De luce* と *Hex.* Part. 2. の全体が「光を分有するが，光と区別されるモノ」として「物体」を描く。

De colore はその「物体」を「透明体」*perspicuum* と呼ぶ。

㉔ *De colore* 全文，および *ibid.* 78 : 6-79 : 25. 後出注㉓を参照。

㉕ (イ) 「光」と「第一質料」が最初に創造されたモノどもであること。

— *De luce* 52 : 17.

《Lux ergo, quae est prima forma in materia prima creata, ……》

《それゆえ、第一質料の中に創造された第一形相である光は、……》(拙訳, 1984. 注⑳)。

— なお、『創世記』の「淵」「水」を物的世界の第一質料として厳密に特定する個所を、*De luce, Hex, De oper. sol.* において見出すことはできなかった。*Hex. Part. 2, Cap. VI, 1.* では、「光」を「神に自己を向けることによって形相化された天使」として、「淵」「水」を「形相化される可能態としての天使」として解釈する文章が見られる。しかし、物体世界生成を述べるグローステストのテキスト全体の流れから推し測って、「光と一対になるものとして最初に創造された淵と水」を「第一質料」を指すものと解釈することは、誤りではないと思われる。

(甲) 光が有する自体的な本性としての「無限な拡散」。

— *De luce* 51 : 10-13.

《Formam primam corporalem, quam quidam corporeitatem vocant, lucem esse arbitror. Lux enim per se in omnem partem se ipsam diffundit, ita ut a puncto lucis sphaera lucis quamvis magna subito generetur. nisi obsistat umbrosum.》

《或る人びとが「物体性」と呼んでいるところの「物体的な第一形相」は「光」である、と私は思う。というのは、光は自体的に(ほかの力の助けによらずに)自分自身をあらゆる部分へと拡散し、その結果、遮蔽物が妨げない限り、光の点を起点として、いくらでも大きな光の球が瞬時にして生み出されるからである。》(拙訳, 1984. 注㉑に同じ)。

— *Hexa. Part. 2, Cap. X.*

《Est itaque lux sui ipsius naturaliter undique multiplicativa, et, ut ita dicam, generativitas quedam sui ipsius quodammodo de sui substantia. Naturaliter enim lux undique se multiplicat gignendo, et simul cum est generat. Quapropter replet circumstantem locum subito; lux enim prior secundum locum gignit lucem sequentem; et lux genita simul gignitur et est et gignit lucem sibi proximo succedentem; et illa succedens adhuc succedentem ulterius; et ita consequenter. Unde in instanti uno unus lucis punctus replere potest orbem lumine.》

《さて、光は自分自身を本性的にあらゆる場所へと多重化する性質を有し、いわば、何らかの仕方で自分の実体から自分自身を生産する或るものである。なぜなら、本性的に光は、生み出すことによっていたるところに自分を多重化し、しかも、存在すると同時に生み出すからである。それゆえ、光は周囲の場所を瞬時に満たす。すなわち、場所的に先行する光は後続する光を生み出し、生み出される光は同時に生み出されもし、存在もし、自分に隣接して後続する光を生み出しもする。また、その後続する光もまたさらに後続する光を生み出す。そして、同様に続いて行く。それゆえ、光の一点は一瞬のうちに球を光芒によって満たすことができる。》(拙訳, 未発表)。

(乙) 第一質料との関係から生じた光の拡散の「限界づけ」。および、そのために生じた「有限の大きさを有する天球」。

— *De luce* 52 : 17-21.

《Lux ergo, quae est prima forma in materia creata, seipsam per seipsam undique infinities multiplicans et in omnem partem aequaliter porrigens, materiam, quam relinquere non potuit, secum distrahens in tantam molem, quanta est mundi machina, in principio temporis extendebat.》

《それゆえ、第一質料の中に創造された第一形相である光は、(1) 自分自身を自分自身であらゆる場所へと無限回多重化しながら、また、(2) (自分自身を) すべての部分へと均等に押し広げながら、(3) 置き去りにすることができない(第)質料を自分と共に離散させながら、それを「世界という機械」が存在しうるだけの量にまで、時の始めにおいて広げたのである。》(拙訳, 1984. 注㉒)。

— *ibid.* 51 : 17-23, 注㉓。

— *ibid.* 52 : 21-53 : 35, 注㉔。

— *ibid.* 54 : 11-22, 注㉕。

㉑ — *De luce* 51 : 17-23.

«Corporeitas vero est, quam de necessitate consequitur extensio materiae secundum tres dimensiones, cum tamen utraque, corporeitas scilicet et materia, sit substantia in se ipsa simplex, omni carens dimensione. Formam vero in se ipsa simplicem et dimensione carentem in materiam similiter simplicem et dimensione carentem dimensionem in omnem partem inducere fuit impossibile, nisi seipsam multiplicando et in omnem partem subito se diffundendo et in sui diffusionem materiam extendendo, cum non possit ipsa forma materiam derelinquere, quia non est separabilis, nec potest ipsa materia a forma evacuari.»

《さて、物体性はいかなる寸法にも欠けている。なぜなら、物体性から必然的に「質料の三次元的な広がり」が結果するが、両方とも、つまり物体性も^(第)質料も「自体的に単純な実体」であるからである。しかし、「自体的に単純であり寸法を欠いている^(物的な第一)形相^(物体性)」が、「同様に^(自体的に)単純で寸法を欠いている^(第)質料」へと、どの部分に向かって寸法を導き入れることが可能であったのは、あの形相^(物体性)が、(1) 自分自身を多重化すること、(2) 瞬時に自分をすべての部分へと拡散すること、(3) そして自分を拡散することによって^(第)質料を広げること、これらのことによる以外には方法がなかった。なぜなら、(1) 形相は質料から分離されえないがゆえに、また、(2) 質料自体が形相から排泄されえないがゆえに、形相自体が質料を見捨てることはありえないからである。》(拙訳, 1984. 注 20。)

— *ibid.* 52 : 21-53 : 35.

«Nec potuit extensio materiae fieri per finitam lucis multiplicationem, quia simplex finities replicatum quantum non generat, sicut ostendit Aristoteles in de caelo et mundo. Infinites vero multiplicatum necesse est finitum quantum generare, quia productum ex infinita multiplicatione alicuius in infinitum excedit illud, ex cuius multiplicatione producitur. Atqui simplex a simplici non exceditur in infinitum, sed solum quantum finitum in infinitum excedit simplex. Quantum enim infinitum finities infinite excedit simplex. — Lux igitur, quae est in se simplex, finities multiplicata materiam similiter simplicem in dimensiones finitae magnitudinis necesse est extendere.

Est autem possibile, ut aggregatio numeri infinita ad congregationem infinitam in omni numerali se habeat proportione et etiam in omni non numerali. Et sunt infinita alii infinitis plura et alia aliis pauciora. Aggregatio omnium numerorum tam parium quam imparium est infinita, et ita est maior aggregatione omnium numerorum parium, quae nihilominus est infinita; Excedit namque eam aggregatione omnium numerorum imparium. Aggregatio etiam numerorum ab unitate continue duplorum est infinita; et similiter aggregatio omnium subduplorum illis duplis correspondentium est infinita. Quorum subduplorum aggregationem necesse est esse subduplam ad aggregationem duplorum suorum. Similiter aggregatio omnium numerorum ab unitate triplorum tripla est aggregationi omnium subtriplorum suorum istis triplis respondentium. — Et similiter patet de omnibus speciebus numeralis proportionis, quoniam secundum quamlibet earum proportionari potest finitum ad infinitum.

Si vero ponatur aggregatio infinita omnium duplorum continue ab unitate et aggregatio infinita omnium subduplorum illis duplis correspondentium, tollaturque de aggregatione subduplorum unitas vel quivis numerus finitus, iam subtractione facta non remanebit inter aggregationem primam et residuum de aggregatione secunda dupla proportio; sed nec aliqua numeralis proportio, quia si de numerali proportione per subtractionem a minori extremitate relinquatur alia numeralis proportio, oportet, ut subtractum istius, a quo subtrahitur, sit pars aliquota vel aliquot partes aliquotae. Numerus vero finitus numeri infiniti aliquota vel aliquot aliquotae esse non potest. Subtracto igitur numero de aggregatione subdupla infinita non remanet proportio numeralis inter aggregationem duplam infinitam et residuum de

aggregatione subdupla infinita. His ergo ita se habentibus manifestum est, quod lux multiplicatione sua infinita extendit materiam in dimensiones finitas minores et dimensiones finitas maiores secundum quaslibet proportiones se habentes ad invicem, numerales scilicet et non numerales. Si enim lux multiplicatione sui infinita extendit materiam in dimensionem bicubitam, eadem infinita multiplicatione duplicata extendit eam in dimensionem tetracubitam, et eadem subduplicata extendit eam in dimensionem monocubitam; et sic secundum ceteras proportiones numerales et non numerales. >

◀また、アリストテレスが De caelo et mundo (De mundo『天』体論 1.5~7) において示したように、単純なものには有限回多重化されても量を生み出しえないがゆえに、(時の始) 光の有限な多重化によって (第) 質料の「広がり」が生じることはできなかった。しかし、(大提) 単純なものは、無限回多重化されれば有限な量を生み出すはずである。なぜなら、或るもの(A)の無限な多重化から生じる生産物は、この生産物が (無限) 多重化によって生産される際の「多重化されるもの」(A)を無限に超えるからである。しかるに、(小提) 単純なものは単純なものによって無限に超えられることはなく、有限な量だけが単純なものを無限に超える。なぜなら、無限な量は単純なものを無限回無限に超えるからである。——それゆえ、「自体的に単純なものである光」が無限回多重化される時、「同様に単純な (第) 質料」を有限な大きさに所属する (三つ) 次元へと広げることは必然である。

ところで、数の (或る) 無限な加算は (他の) 無限な足し算に対して [I] どんな数的な比においても [II] どんな非数的な比においても関わりをもつことが可能である。また、他の無限どもよりもより多くの無限どもが存在するし、他の無限どもよりもより少ない無限どもも存在する。

[I] (数的な比における関わり) (1) 偶数と奇数のすべてを加算したものは無限である。それはまた、偶数のすべてを加算したものよりも大きい——後者もまた無限ではあるけれども——。なぜなら、前者 (偶数と奇数のすべてを加算したもの) は後者 (偶数のすべてを加算したもの) を奇数のすべてを加算したものだけ越え出ているからである。また、(2) 1から始まる数 (1, 2, 3, 4, …) を連続的に2倍して加算したもの $(\frac{2+4+6+\dots}{8+10+\dots})$ は無限である。同様に、これら2倍の数 $(\frac{2}{8}, \frac{4}{10}, \frac{6}{12}, \dots)$ に対応する $\frac{1}{2}$ 倍の数 $(\frac{1}{4}, \frac{2}{5}, \frac{3}{6}, \dots)$ をすべて加算したのも無限である。これら $\frac{1}{2}$ 倍の数どもを加算したもの $(\frac{1+2+3+\dots}{4+5+\dots})$ は、この数ども $(\frac{1}{2} \text{ 倍の数ども})$ の2倍の数どもを加算したものの $(\frac{2+4+6+\dots}{8+10+\dots})$ に対して $\frac{1}{2}$ 倍であるはずである。(3) 同様に、1から始まる数を3倍してすべて加算したもの $(\frac{3+6+9+\dots}{12+15+\dots})$ は、これら3倍の数に対応する「これら3倍の数の $\frac{1}{3}$ 倍の数 $(\frac{1}{3}, \frac{2}{4}, \frac{3}{5}, \dots)$ 」をすべて加算したもの $(\frac{1+2+3+\dots}{4+5+\dots})$ に対して3倍である。(4) こうした関係は同様に、数的な比のすべての種類について明かである。なぜなら、それら (数的な比の種類) のどれに基づいても、有限なものが無限なものに対して比をもちうるからである。

[II] (非数的な比における関わり) しかし、1から始まる数を連続的に2倍してすべてを加算したものが無限であり $(\frac{2+4+6+8+\dots}{10+\dots} = \infty)$ 、また、これら2倍の数に対応するその $\frac{1}{2}$ 倍の数すべてを加算したものが無限であり $(\frac{1+2+3+4+\dots}{+\dots} = \infty)$ 、さらにまた、 $\frac{1}{2}$ 倍の数を加算したもから「1」、あるいは、どれか有限な数が除去されるならば $(\frac{2+3+4+\dots \text{ある}}{\text{いは} 1+2+4+\dots})$ 、除去が生じるやいなや、第一の加算 $(\frac{2+4+6+8}{+10+\dots})$ と第二の加算の残り $(\frac{2+3+4+\dots \text{ある}}{\text{いは} 1+2+4+\dots})$ との間には「2倍の比関係」は存在しないことになろう。いや、どんな数的な比も持続しないことになろう。なぜなら、もし (数列) より小さい側の端から (或る) 除去することによって「数的な比」から「他の数的な比」が残されるとすれば、「除去されたもの」は、それが除去されるものものの何分の1の部分であるか、あるいは、何分のいくつかの部分になる必要があるが、しかし、有限な数は無限な数の何分の1の部分であることも、何分のいくつかの部分であることもできないからで

ある。それゆえ、「 $\frac{1}{2}$ 倍の数どもを無限に加算したもの」から或る数を除去するならば、「2倍の数を無限に加算したもの」と「 $\frac{1}{2}$ 倍の数を無限に加算したものの残り」との間には、「数的な比」は残存しないことになる。これらがこのような関係にあるがゆえに、光が、何であれ相互に関わり合う比——すなわち、数的な比と非数的な比——に基づいて、自らを無限に多重化することによって（第_一）質料をより小さい有限な寸法とより大きい有限な寸法へと広げることは明かである。すなわち、もし光が自らを無限に多重化することによって（第_二）質料を2クビットの寸法へと広げるならば、光は、同じく自らを2倍の無限に多重化することによって（第_一）質料を4クビットの寸法へと広げるし、また、同じく自らを $\frac{1}{2}$ 倍の無限に多重化することによって（第_二）質料を1クビットの寸法へと広げる。さらに、同じようにして、光は（第_一）質料を他の数的な比と非数的な比に基づいて広げる。》（拙訳，1984. 注⑳）

㉗ *De luce* の内容全体を読んでも、「光」の本性および「量的なものの原子となった質料」の本性が、物体世界の中のあらゆる変化のもとで、それぞれ一貫して不変であるというグローステストの考えは明かである。しかし、あえて参照するならば、

— *De luce* 57 : 34-58 : 7

◀*Ipsae autem caelestes sphaerae, quia completae sunt, non receptibiles rarefactionis aut condensationis, lux in eis non inclinatur partes materiae a centro, ut rarefaciat eas, vel ad centrum, ut condenset. Et propter hoc ipsae sphaerae caelestes non sunt receptibiles motus sursum aut deorsum, sed solummodo motus circularis a virtute motiva intellectiva, quae in sese aspectum corporaliter reverberans ipsas sphaeras corporali circulat revolutione. Ipsa autem elementa, quia incompleta, rarefactibilia et condensabilia, inclinatur lumen, quod in eis est, aut a centro, ut rarefaciat, aut ad centrum, ut condenset. Et propter hoc ipsa sunt aut sursum ut deorsum naturaliter mobilia.* ▶

◀しかし、これらの諸天球は、すでに完成されているがゆえに、希薄化あるいは濃密化を受け入れることができない。それゆえ光は、それら（第_二, 第_三…
…第_九の天球）において質料の諸部分を希薄化するために中心から（外側）向けてそれら（質料の諸部分）を動かすこともなく、また、それらを濃密化するために（外側）中心へ向けてそれらを動かすこともない。それゆえ、これら諸天球は、上方への運動を、あるいは、下方への運動を受入れることはできないが、「知性的な動力」による円運動だけは受け入れることができる。なぜなら、知性的な動力は、物的に視線を自分自身へと投げ返すのでこれら諸天球を物的な回転によって円運動させるからである。

しかし、あの諸元素は、完成されておらず、希薄化可能であり濃密化可能であるがゆえに、それらの中に存在する光は、それらを希薄化するために中心から（外側）動かすか、あるいは、それらを濃密化するために（外側）中心へと動かす。それゆえ、それらは本性上、上方への、あるいは、下方への運動が可能である。》（拙訳，1984. 注㉑）

㉘ — *De luce* 52 : 17-21.

◀*Lux ergo, quae est prima forma in materia prima creata, seipsam per seipsam undique infinities multiplicans et in omnem partem aequaliter porrigens, materiam, quam relinquere non potuit, secum distrahens in tantam molem, quanta est mundi machina, in principio temporis extendebat.* ▶

◀それゆえ、第一質料の中に創造された第一形相である光は、(1) 自分自身を自分自身であらゆる場所へと無限回多重化しながら、また、(2)（自分自身を）すべての部分へと均等に押し広げながら、(3) 置き去りにすることができない（第_一）質料を自分と共に離散させながら、それを「世界という機械」が存在しうるだけの量にまで、時の始めにおいて広げたのである。》（拙訳，1984. 注㉒）

— *ibid.* 54 : 11-22.

◀*Lux ergo praedicto modo materiam primam in formam sphaericam extendens et extremas partes ad summum rarefaciens, in extrema sphaera complevit possibilitatem materiae, nec reliquit eam susceptibilem ulterioris impressionis. Et sic perfectum est corpus*

primum in extremitate sphaerae, quod……》,

《それゆえ、光は、前述の仕方によって第一質料を球形に広げるとともに、最も外の諸部分を最高度に希薄化しながら、最も外側の球において（第_二）質料の可能性を完全に補完した。そして、（第_二）質料がそれ以上に押し広げられることを受け入れる可能性を残さなかった。このようにして第一物体が球の最外部において完成されたのである。》（拙訳、1984. 注20。）

- 29 (イ) 「第一の物体」「第一の天球」において最も純度が高い仕方で所有されている「物体の第一形相、光」の本質について。

— *De luce* 52 : 10-16.

《Amplius : formam primam corporalem formis omnibus sequentibus digniorem et excellentioris et nobilioris essentiae et magis assimilatae formis stantibus separatis arbitrantur sapientes. Lux vero omnibus rebus corporalibus dignioris et nobilioris et excellentioris essentiae est, et magis omnibus corporibus assimilatur formis stantibus separatis, quae sunt intelligentiae. Lux est ergo prima forma corporalis.》

《その上、(1) 「物的な第一形相」(光) は、それに続くすべての形相よりも優れている。(2) それは、（それに続くすべての形相よりも）より卓越したより高貴な本質を所有している。(3) それは、「分離して自存する諸形相」に（それに続くすべての形相よりも）よりいっそう類似している、と賢者たちは言っている。しかるに、光は、物的なものどもすべてよりもより優れた、より高貴な、より卓越した本質を所有しており、「知性実体という分離して自存する諸形相」にすべての物体よりもいっそう類似している。それゆえ、光は、物的な第一形相である。》（拙訳、1984. 注20。）

(ロ) 「物体の第一形相」を最も純粋な仕方で所有するがゆえに、第一の物体が「単純性」と「不変性」を有すること。

— *De luce* 54 : 21-30.

《Et sic perfectum est corpus primum in extremitate sphaerae, quod dicitur firmamentum, nihil habens in sui compositione nisi materiam primam et formam primam. Et ideo est corpus simplicissimum quoad partes constituentes essentiam et maximam quantitatem, non differens a corpore genere nisi per hoc quod in ipso materia est completa per formam primam solum. Corpus vero genus, quod est in hoc et in aliis corporibus, habens in sui essentia materiam primam et formam primam, abstrahit a complemento materiae per formam primam et a diminutione materiae per formam primam.》

《このようにして第一物体が球の最外部において完成されたのである。この「第一物体」は「堅い殻」と言われ、自らを構成するために第一質料と第一形相だけしか所有していない。それゆえ、それ（第_一物体）は、本質と最大な量とを構成する諸部分に関して最も単純な物体であり、「自らの中で（第_二）質料が第一形相だけによって補完されていること」によってのみ物体という類から異なっている。他方、これやあれやの諸物体において成り立つ物体という類は、自らの本質の中に第一質料と第一形相を所有しているけれども（それを）「第一形相によって（第_二）質料が補完されること」から引き離し、「第一形相によって（第_二）質料が縮減せしめられること」から引き離している。》（拙訳、1984. 注20。）

(ハ) 「第一の物体」が最も完成された物体であること。

『*De luce*』全体が、「第一の物体」が最も完成された物体であることを指し示している。具体的かつ個別的に特定して「第一の物体」の最大度の完全性を述べている文章は『*De luce*』の中には見当たらない。

しかし、それを、前後関係から明かに指し示している文章はある。

— *De luce* 56 : 36-57 : 1.

《Et species et perfectio corporum omnium est lux : sed superiorum corporum magis spiritualis et simplex, inferiorum vero corporum magis corporalis et multiplicata.》

《物体どもすべての種であり完全性であるものは光である。しかし、上位の物体どもの種であり完全性であるものは「より気息的で単純な光」であり、下位の物体どもの種であって完全性であるものは「よ

り物的で多重化された光」である。》(拙訳，1984. 注⑩。)

— *ibid.* 56 : 14-23.

《Hoc igitur modo productae sunt in esse sphaerae 13 mundi huius sensibilis : novem scilicet caelestes, inalterabiles, inaugmentabiles, ingenerabiles et incorruptibiles, utpote completae, et quattuor existentes modo contrario, alterabiles, augmentabiles, generabiles et corruptibiles, utpote incompletae. Et patens est, quoniam omne corpus superius secundum lumen ex se progenitum est species et perfectio corporis sequentis. Et sicut unitas potentia est omnis numerus sequens, sic corpus primum multiplicatione sui luminis est omne corpus sequens.》

《つまり，この仕方では，この可感的な世界の十三個の球が存在へと造り出された。それらはすなわち，(1) 完成されたものとして，変化しえないし，増大もしえないし，生成もしえないし，消滅もしえない九個の天球，および，(2) 未完成なものとして，(さきの九) 反対の仕方では存在するところの，変化しうるし，増大もしうるし，生成もしうるし，消滅もしうる四つの球である。——そして，「自分から生み出される光」に基づいてより上位にある物体はすべて，後続する物体の種であり，それ(後続する物体)を完成するものであるということは明かである。また，可能性によって1が「後続するすべての数」であるのと同様に，自らの光の多重化によって第一物体は，後続するすべての物体である。》(拙訳，1984. 注⑩。)

⑩ De luce 54 : 31-55 : 30.

《Hoc itaque modo completo corpore primo, quod est firmamentum, ipsum expandit lumen suum ab omni parte sua in centrum totius. Cum enim sit lux perfectio primi corporis, quae naturaliter se ipsam multiplicat a corpore primo, de necessitate diffunditur lux in centrum totius.

Quae cum sit forma tota non separabilis a materia in sui diffusionem a corpore primo, secum extendit spiritualitatem materiae corporis primi. Et sic procedit a corpore primo lumen, quod est corpus spirituale, sive mavis dicere spiritus corporalis. Quod lumen in suo transitu non dividit corpus per quod transit, ideoque subito pertransit a corpore primi caeli usque ad centrum. Nec est eius transitus, sicut si intelligeretur aliquid unum numero transiens subito a caelo in centrum — hoc enim forte est impossibile —, sed suus transitus est per sui multiplicationem et infinitam generationem luminis. Ipsum ergo lumen a corpore primo in centrum expansum et collectum molem existentem infra corpus primum congregavit; et cum iam non potuit minorari corpus primum, utpote completum et invariabile, nec potuit locus fieri vacuus, necesse fuit, ipsa in congregatione partes extimas molis extendi et disgregari. Et sic proveniebat in intimis partibus dictae molis maior densitas, et in extimis augmentabatur raritas; fuitque potentia tanta luminis congregantis et ipsa in congregatione segregantis, ut ipsas partes extimas molis contentae infra corpus primum ad summum subtiliarent et rarefacerent. Et ita fiebat in ipsis partibus extimis dictae molis sphaera secunda completa nullius impressionis ultra receptibilis. Et sic est complementum et perfectio sphaerae secundae : lumen quidem gignitur ex prima sphaera, et lux, quae in prima sphaera est simplex, in secunda est duplicata. Sicut autem lumen genitum a corpore primo complevit sphaeram secundam et intra secundam sphaeram molem densiorem reliquit, sic lumen genitum ex sphaera secunda sphaeram tertiam perficit et infra ipsam sphaeram tertiam molem adhuc densiorem congregatione reliquit. Atque ad hunc ordinem processit ipsa congregatio disgregans, donec complerentur novem sphaerae caelestes et congregaretur inter sphaeram nonam infimam moles densata, quae esset quattuor elementorum materia. Sphaera autem infima, quae est sphaera lunae……》

《このような仕方では「堅い殻」という「第一物体」が完成されたのであるから，それ(第一物体)は，自らの光を自らのあらゆる部分から全体の中心へと広げる。なぜなら，光は「第一物体」の完全性であり，自然本性的に自分自身を第一物体から多重化するがゆえに，必然的に光は，全体の中心へと注ぎこまれ

るからである。この光は、自らを第一物体から注ぎ出すとき、^(第)質料から分離しえない全的な形相であるから、自分と一緒に第一物体の「質料の気息性」を広げる。このようにして「気息的な物体」あるいは、むしろあなたが「物的な気息」と言いたいものである光が第一物体から進み出る。この光は、自らが移動するにあたって、自らがそれを通して移動するその物体を分割しない。それゆえ、この光は第一の天の物体から全体の中心まで瞬時に通り抜ける。また、この光の移動は、天から全体の中心へと瞬時に移動する「数的に一なるもの」と理解されることがかりにあるとしてもそのようなものではない——なぜなら、このことはおそらく不可能であろうから——。むしろ、光の移動は自らを多重化することと光を無限に生成することによるのである。

それゆえ、光自体は、第一物体から中心へと伸びて集まるとき、第一物体の下位に存在する量的なものを集めた。そして、第一物体は、すでに完成されたものであり不可変的なものである限りもはや減じられることが出来なかったがゆえに、また、場所は空虚になりえなかったがゆえに、必然的に、^(量的なものが)集合する過程において量的なものの最も外側の諸部分が広げられ分離せしめられた^(第二の球の生成)。このようにして、上述の量的なものの最も内側の諸部分においてはより大きな濃密性が生じ、また、最も外側の諸部分においては希薄性が増大した。また、^(量的なものを中心へと)集める光の力および、集めるときに分離させる光の力は、第一物体の下位に包含されている量的なもののあの最も外側の諸部分を最高度に希薄化する程に大きかった。こうして、上述の量的なものの最も外側の諸部分において、「第二の球」が生成し、その向こうで^(第三第四…の球で)受容されうるいかなる圧力によっても補完されないものとなった。^(光による)第二の球の完成と完全性は次の通りである。すなわち、光は第一の球から生み出される、そして第一の球においては単純である光は、第二の球においては二重化されている。

さて、「第一物体から生み出された光」が第二の球を完成し、第二の球の内側に更に濃密な量を残したのと同様に、「第二の球から生み出された光」は第三の球を完成し、第三の球の内側に集合化によってなおいっそう濃密化される量を残す。そして、この順序にしたがって分離する集合化が進み出て、九個の天球が完成され、四元素の質料であるところの濃密化された量が最下位の第九の球の内側に集合化されるに至ったのである。しかるに、「月の球」である「最下の球」は……》(拙訳、1984. 注②。)

(31) *De luce* : 55 : 30-56 : 18

《Sphaera autem infima, quae est sphaera lunae, ex se etiam lumen gignens, lumine suo et molem infra se contentam congregavit et congregando partes eius extimas subtiliavit et disgregavit. Non tamen fuit huius luminis potentia tanta, ut congregando partes eius extimas disgregaret ad summum. Propterea remansit in omni parte molis huius imperfectio et possibilitas receptionis congregationis et disgregationis. Et pars suprema molis huius disgregata non ad summum, sua tamen disgregatione ignis effecta, remansit adhuc materia elementorum.

Et hoc elementum ex se lumen gignens et molem infra se contentam congregans eius partes extimas disgregavit, minori tamen ipsius ignis disgregatione; et sic produxit ignem. — Ignis vero ex se lumen gignens et molem infra contentam congregans eius partes extimas disgregavit, minori tamen ipsius disgregatione; et sic aërem produxit. — Aër quoque ex se corpus spirituale vel spiritum corporalem generans et infra se contentum congregans et congregando exteriora eius disgregans aquam produxit et terram. Sed quia in aqua plus remansit de virtute congregante, quam disgregante, remansit etiam ipsa aqua cum terra ponderosa.

Hoc igitur modo productae sunt in esse sphaerae 13 mundi huius sensibilis: novem scilicet caelestes, inalterabiles, inaugmentabiles, ingenerabiles et incorruptibiles, utpote completae, et quattuor existentes modo contrario, alterabiles, augmentabiles, generabiles et corruptibiles, utpote incompletae. >>

《しかるに、「月の球」である「最下の球」は、自分自身からも光を生み出し、自らの光によって(1)自らの下位に含まれている量を集め、(2)集めることによってあの量の最も外側の諸部分を微細化し分離させた。しかし、この光^(月の球の光)の能力は、あの量^(月の球の下位に含まれている量)の最も外側の諸部分を集めることによ

って最高度に分離させるのに十分ではなかった。それゆえ、この量（月の球の下位に含まれている量）のすべての部分において不完全性および「集合作用と分離作用を受け入れる可能性」が残留した。そして(1)この量の最上の部分は、最高度には分離されなかったが、しかし分離によって「火」となり、なおも諸元素（空気、水、土）の質料であり続けた。この元素（元素とし）は、自分自身から光を生み出しながら、自らの下位に包含されている量を（全体の中心へと向けて）集めながら、その最も外側の部分を分離させたが、しかし火そのものの分離は（自らの下位に包）よりも少量であった。この元素（元素とし）はこのようにして火を造り出した。ところで、(2)火は、自分自身から光を生み出して、（火）下位に包含されている量を集めながら、その量の最も外側の諸部分（空気の球）を分離したけれども、その量の分離は（空気の球の下位に包含されている量）よりも少量であった。このようにして火は空気を造り出した。(3)空気も、自分自身から「気息のな物体もしくは物的な気息」を生み出して自分の内側に包含されているものを集め、集めることによってその外部のものどもを分離しながら水と土を造り出した。しかし、水の中には分離する力よりも集まる力がより多く残留していたので、水も土と共に重いままで残留した。つまり、この仕方では、この可感的な世界の十三個の球が存在へと造り出された。それらはすなわち、(1)完成されたものとして、変化しえないし、増大もしえないし、生成もしえないし、消滅もしえない九個の天球、および、(2)未完成なものとして、（さきの九個とは）反対の仕方では存在するところの、変化しうるし、増大しうるし、生成しうるし、消滅しうる四個の球である。》（拙訳、1984. 注②〇）

③② *Hexa, Part. 2, Cap. X, 4.* ここに具体的に明示されていなくとも、この箇所は明かに『創世記、第一章、十四節～十九節』に対する言及である。

《Hec, ut dicit Augustinus, cum de mundi luminaribus radios suos terras usque per-tendat, tamen eius radii per queque immunda diffusi non contaminantur.》

《アウグスティヌスが述べているように、これ（光lux）は自らの光線を世界の「もろもろの光体」から大地にまでとどけるけれども、しかし、これ（光lux）の光線は、それぞれの汚れた「光体」を介して拡散されるけれども汚されてはいない。》（拙訳、未発表。）

③③ (1) — *De oper. sol. n. 9*

《Praeterea, ideo sol potest dici annuntiare in exitu, quia lumen eius principaliter inter virtutes corporeas educit et exire facit de potentia ad actum figuras et formas et species corporales tam in plantis quam in animalibus. Ipsae figurae et formae et species rerum sensibilibus quasi quaedam litterae sunt seu quaedam verba annuntiantia naturas rerum occultas et annuntiantia dei invisibilia, quapropter sol est annuntians naturas rerum occultas et invisibilia Dei in exitu de potentia ad actum et de occulto ad manifestum, quem exitum operatur in plantis et animalibus ceterisque inferioribus mundi speciebus.》

《それに加えて更に、「もろもろの物的な力の中でも、なかんずくそれ（太陽）の光が主力となって、植物どもそして動物どもにおいて、物的なかたち、形象、形態を、可能態から現実態へと引き出し、あるいは、現われ出るようにさせる」がゆえに、「太陽は（無か）現われ出ることによって（神の知）告げ知らせる」と言われうるのである。もろもろの可感的なものどものかたち、形象、形態そのものはいわば文字のようなものである。すなわち、ものどもの秘められた本性どもを告げたり、神の見えぬことどもを告げたりする言葉のようなものである。それゆえ、太陽はものどもの秘められた本性どもを、そして、神の見えぬことどもを、——それらが可能態から現実態へと、秘められたものから明かにされたものへと現われ出る時に——（照らすこと）告げる。そして、植物どもにおいて、動物どもにおいて、またそのほか世界のより下位のものどもにおいて、それら（秘められた）の（存在）の現われ出を働きかけるのは太陽である。》（拙訳、未発表。）

— *ibid. n. 11.*

《Quod sequitur: *vas admirabile*, exponendum est secundum Johannem Chrysostomum super illud Johannis, in principio erat verbum, ubi dicit quod sol causaliter continet in se omnes formas et species et colores huius mundi visibilis.》

《続いて「vas admirabile」について。この語句は、『ヨハネによる福音書』《初めに言葉があった。》の箇所についてのヨハネス・クリゾストムス(の解)に従って解説されなくてはならない。そこで彼(ヨハネス・クリゾストムス)は「太陽は、『この可視的な世界の形態と形象と色のすべて』を、(自分がそれらの)原因であるという仕方

で自分の中に所有している。」と述べている。》(拙訳、未発表。)

(ロ) なお、「形態を有するものども一般」の本性および構造については、『De luce』の全体がそれを明かにしている。

64 — *De colore* 78 : 4

《Color est lux incorporata perspicuo.》

《色は「透明体によって物体化された光」である。》(拙訳、「グローステストの光概念に関する諸問題 III・翻訳 Robert Grosseteste : De colore」札幌大学女子短期大学部「紀要」第9号 1987. pp. 39-47。)

— *Hex. Part. 2, Capt. x, 2.*

《Lux namque incorporata in perspicuo humido color est.》

《湿気の透明体の中で物体化した光が色である。》(拙訳、未発表。)

65 *De colore* 全文。78 : 6-79 : 26

《Color est lux incorporata perspicuo. — Perspicui vero duae sunt differentiae : est enim perspicuum aut purum separatum a terrestreitate, aut impurum terrestreitatis admixtione. — Lux autem quadrifarie partitur : quia aut est lux clara vel obscura, pauca vel multa. Nec dico lucem multam per subiectum magnum diffusam. Sed in puncto colligitur lux multa, cum speculum concavum opponitur soli et lux cadens super totam superficiem speculi in centrum sphaerae speculi reflectitur. Cuius etiam lucis virtute in ipso centro collecta combustibile citissime inflammatur. Lux igitur clara multa in perspicuo puro albedo est. Lux pauca in perspicuo impuro nigredo est. Et in hoc sermone explanatus est sermo Aristotelis et Averrois, qui ponunt nigredinem privationem et albedinem habitum sive formam.

Sequitur etiam ex hoc sermone, quod colores proximi albedini, in quibus potest fieri recessus ab albedine et permutatio, septem sunt, nec plures nec pauciores. — Similiter septem erunt proximi nigredini, quibus a nigredine versus albedinem ascenditur, donec fiat concursus aliorum septem colorum, quibus ab albedine descenditur. Cum enim albedinis essentiam tria constituent, scilicet lucis multitudo, eiusdemque claritas et perspicui puritas, duobus manentibus cuiuslibet trium potest fieri remissio, eritque per hunc modum trium colorum generatio ; vel quolibet trium solo manente, duorum reliquorum erit remissio, et sic fiet aliorum colorum a tribus prioribus trina generatio : aut omnium trium simul erit remissio ; et sic in universo ab albedine erit septem colorum immediata progressio.

Consimilis est ratio, per quam ostenditur a nigredine per septem colores illi proximos versus albedinem ascensio. Erunt ergo in universo colores sedecim : duo scilicet extremi et hinc inde septem extremis annexi hinc per intensionem ascendentes illinc per remissionem descendentes ac in medio in idem concurrentes. In quolibet autem colorum mediorum gradus intensionis et remissionis sunt infiniti. Unde qui per numerationem et combinationem eorum, quae intenduntur et remittuntur, multitudinis scilicet et claritatis luminis et etiam puritatis perspicui et oppositorum his, fiunt colores novem, per numerationem graduum intensionis et remissionis erunt infiniti.

Quod autem secundum dictum modum se habeat colorum essentia et eorundem multitudo, non solum ratione, verum etiam experimento manifestum est his, qui scientiae naturalis et Perspectivae profundius et interius noverunt principia. Quod est, quia sciunt figurare perspicuum, sive fuerit purum sive impurum ita, ut in ipso recipiant lumen clarum, sive

si maluit obscurum et per figuram formatam in ipso perspicuo lumen paucum faciant, aut ipsam pro libito multiplicent; et sic per artificium omnes modos colorum, quos voluerint visibiliter stendere possunt. >>

ロバート・グローステスト『色について』全文。

Ⅰ [色を構成する要素。] 色は「透明体によって物体化された光」である。——さて、透明体の種類は二つである。すなわち、透明体は、あるいは(1)土性から分離されているがゆえに純粹であり、あるいは(2)土性が混合しているために不純である。——しかるに、光は四つに分類される。なぜなら、光は(1)明るい暗い、または(2)少ないか多いかであるからである。私は、「多い光」とは「大きな基体によって拡散せしめられた光」であると言っているのではない。むしろ、湾曲した鏡が太陽に向けて置かれ鏡の全表面に落ちる光が鏡の球面の中心へと反射するとき、多くの光が一点に集められるのである。この中心に集められたあの光の力によっても可燃性のものはすぐに燃え出す。

Ⅱ [色の生成についての推論] それゆえ、(基体の大小にかかわらず) 純粹な透明体における明るくて多い光が白色であり、純粹でない透明体における少ない光が黒色である。この学説においては、「黒は欠如であり、白は所有態あるいは形相である」と主張しているアリストテレスとアヴェロエスの学説が説き明かされているのである。

この学説から、また、白に隣接する色——つまり、白からの衰弱および変化として生成しうる色——は七つあってそれより多くも少なくもないということが帰結される。

同様に、黒に隣接する色——つまり、黒から白への上昇として現われ、「白からの下降として現われる他の七つの色」と合流することになる色——も七つあることになろう。

Ⅲ [白からの下降における七色の生成について] すなわち、白の本質を構成するものは次の三つである、すなわち、「光の多さ」、「光の明るさ」および「透明体の純粹性」である。それゆえ(1) (これら三つの構成要素の) 二つがそのまま留まり、三つの中のどれか一つの衰弱が起こることが可能である、この仕方によれば三つの色が生成することになろう。(2) あるいは、三つの中のどれか一つだけが留まり、残り二つの衰弱が起こりうるであろう、このようにして、先の三つとは別な色どもが三つ生成することになろう。(3) あるいは、三つすべての衰弱が同時に起こりうるであろう。このようにして(1),(2),(3)の(仕方において)、宇宙においては、白から七つの色が直接に発出することになろう。

Ⅳ [黒からの上昇における七色の生成について] 黒に隣接する七つの色を介して黒から白へと向かう上昇が証示される際の論拠も(七つの色が発出する場合に) 類似している。それゆえ、宇宙には十六の色が存在することになろう。すなわち、(1) 両端の二つの色(白と黒)、および(2) 両端から別の両端につながる七つの色——すなわち、(イ) こちらからは(黒から) 増強によって上昇し、(ロ) こちらからは(白から) 衰弱によって下降し、真ん中においては同じになって合流する(それぞれ) 七つの色——が存在することになろう。

Ⅴ [生成した十六のおのおのの色における増強と衰弱の諸段階がもたらす色の相違について] しかるに、(白と黒の) 中間の色のどれにおいても、増強と衰弱の段階は無限に存在する。それゆえ、強められるものども——すなわち、「光の多さ」と「光の明るさ」、および「透明体の純粹性」さらにこれらに対立するものども(「少なさ」「暗さ」「不純性」)——の列挙と組み合わせによって生じる九つの色は、増強と衰弱の諸段階を列挙することによって無限になるであろう。

Ⅵ [むすび] さて、色の本質と色の多さが上述の仕方では存在していることは、自然学と透明体学の諸原理をかなり深くかなり奥まで知っている人びとには、理性によってばかりではなく実験によっても明かである。というのは、彼らは純粹なものであれ純粹でないものであれ透明体を形づくることを知っている、(1) 透明体において明るい光を受け入れたり、(2) あるいはもしのぞむならば暗い光を受け入れたり、(3) 形づくられた形態を介して透明体自体の中に少量の光をつくったり、(4) 形づくられた形態を任意に多重化したりするからである。このように彼らは、技術によって、彼らがのぞむ色のすべての様態を視覚的に示すことができるのである。>> (拙訳、「グローステストの光概念に関する諸問題Ⅲ、翻訳“Robert Grosseteste: De colore”」札幌大学女子短期大学部「紀要」第9号1987. pp. 39-47。)

36 (i) 光と第一質料の二要素。光自体の「無限な拡散」。第一質料による「光の無限な拡散」の限界づけについて。注29, 28参照。

(ii) 第一物体における「光の多さ、明るさ、透明性の純度」の最大性について。注29参照。

- (iii) 第二から第九の天球（透明体）における光の強さ、多さの減衰について。注30参照。
 (iv) 第十から第十三の天球（透明体）における、第一質料に起因する「透明性の純度」の減衰について。そして、まだ太陽が創造されていないにもかかわらず、この段階において色が発生することについて。注31参照。および、

— *Hex. Part. 4, Capt. VII, 2.*

«Nec putet aliquis terram non potuisse a principio fuisse coloratam, ideo quia color est lux in perspicuo et nondum erat lux creata; quia si erat condicio rerum successiva, erat ignis huic terre calcabili a principio conmixtus, sicut et nunc est, cuius lucis incorporatio in humore terrestri reddebat terram coloratam. Non enim hec elementa que hic apud nos sentimus sunt pura, sed singulis singula permixta et a predominantibus denominata.»

◀何びとといえども、「色は透明体における光であり、そして（創造の最初の三日間において太陽の）光がまだ創造されてはいなかったのであるから、地が始め（創造の最初の三日間）において色づけられたということは、ありえぬことであった」と考えることは出来ない。その理由は以下の通りである。もし（創造の最初の三日間に造られた十三個の天球において、天上の諸球と月下界の）モノどもの（本性上の）制約が連続的であったのであれば、（現在がそうであるように）火はこの固い地に混じっていた。そのため、「地の湿気」において、この（火という不完全な在り方において地の湿気に混じった）光が物体化して地を色づけられたものとしたのである。それは、ここにわれわれのもとにわれわれが感覚しているこれら元素ども（火、空気、水、土）は純粹ではなく、それぞれ（火、空気、水、土）の元素にそれぞれ（火、空気、水、土）の元素が混ぜ合わされ、（混ぜ合わせられた）支配的なものどもによって（それぞれが火、空気、水、土と）名付けられる、（それゆえ、すべての元素どもにはみな火が混じっており、その結果、元素どもはみな火の光を物体化することによって色づけられる）からである。（それゆえ、創造の最初の三日間、太陽の光が創造されるより先きに「地」は色づけられていた。▶（拙訳、未発表。）

37) *De luce* 55 : 30-56 : 18. 注31を参照。

ibid. 57 : 34-58 : 7. 注32を参照。

38) *De oper. sol.* n. 6.

«Cum enim dicatur humanus oculus mundi et habeat in se virtutis corporalis visivae et visibilis radicem. (中略) Aliter autem intelligitur sol esse in conspectu Dei, quia forte lux eius est lux prima visibilis manifestans visui species omnium colorum; et cum color sit lux incorporata, quae propter incorporationem non movet se ad visum nisi cum lux superfunditur, manifestum est quod color connativus est luci visibili. Si igitur lucis visibilis oculis nostris radix est in sole, omnis color habet in sui substantia de luce solari, cui lux superfusa se unit ut faciat colorem actu visibilem, et ita quidquid est conspectibile per naturam lucis conspectibile erit.»

◀太陽は宇宙における人間の眼であると言われ、自らのうちに「物的で視的な力」（視覚）および「物的で視られうる力」（物体どもの形、色、大きさ）の根（光）を有している。（中略）

しかし、「太陽が神の視に基づいて存在する」という文章は、また別の仕方によっても理解される。その理由は次の通りである。多分、それ（太陽）の光は視覚にすべての色どもの形象を示す光の第一のものである。そして、色は物体化された（太陽の）光であり、その（物体化されて色となった）光は物体化されたために（太陽の）光が注ぎかけられる以外に視覚へと運ばれることがない。それゆえ、「色が可視的な光と同一の本性を共有していること」は明かである。それゆえ、「われわれの眼に可視的な光」の根が太陽に在ることになれば、色はすべて自分の実体の中に太陽の光からくる（要素を）有することになる。であるから、光は（太陽から色の上に）注ぎかけられて自分を色に合一し、（その結果）色を現実態において（われわれの視覚に）見られうるものにするのである。したがって、見られうるものが何であれ（現実態に）見られうるものとなる（=現実に見られる）のは（太陽の）光を介してである、ということになる。▶（拙訳、未発表。）

39) — *De colore* 78 : 6

《Color est lux incorporata perspicuo.》

《色は「透明体によって物体化された光」である。》（拙訳，1987. 注39。）

— *De oper. sol.* n. 6.

《…… cum color sit lux incorporata ……》

《……色は「物体化した光」であり……》（拙訳，未発表。）

— *Hex.* Part. 4, Capt. VII, 2.

《lucis incorporacio in humore terrestri reddebat terram coloratam.》

《「地の湿気」において、この光が物体化して地を色づけられたものとしたのである。》（拙訳，未発表。）

— *ibid.* Part. 2, Capt. X. 2.

《Lux namque incorporata in perspicuo humido color est; ……》

《なぜなら、湿気の透明体の中で物体化した光が色である。》（拙訳，未発表。）

小論は日本クザーヌス学会第六回大会（於、同志社大学，1987年11月22日）における研究発表内容に若干の訂正と加筆をほどこし、注において、証明に最少限必要な原文と日本語訳を付したものであります。

大出 哲・室蘭工業大学教授からラテン語の読みについて並々ならぬご指導を賜ってはじめてこの小論が可能となりました。大出教授に厚く御礼を申し上げます。

また、大出 哲教授訳『De coniecturis』、大出 哲教授・野沢建彦先生共訳『Compendium』の貴重な原稿を自由に使わせていただきました。大出 哲教授・野沢建彦先生のご好意に重ね重ね御礼を申し上げます。

1990年3月31日

SUMMARY

On LUX CORPORALIS, COLORES, PERSPICUUM in *De dato patris luminum n. 100* of NIKOLAUS of KUES, comparing them with LUX, COLORES, MATERIA PRIMA, DIAPHANUM in *De luce, Hexaëmeron, De colore, De operationibus solis* of ROBERT GROSSETESTE

Hisashi TAKAOKA

In *De dato patris luminum, chapter II, n. 100*, NIKOLAUS of KUES explains his metaphysical principle “the descent of the Absolute Being to the finite beings, and the contraction of the Absolute Being by the finite beings”, using an example taken from natural optical phenomena: the generation of colours, which is caused by the self-descent of light into colours and contraction of light by colours.

But, concepts such as LUX, COLORES, PERSPICUUM. which make up this explanation, belong to a comprehensive understanding of the whole corporeal world which is in NIKOLAUS’ mind. Unfortunately, NIKOLAUS, in *De dato patris luminum, chapter II, n. 100*, leaves out the explanation of the construction of the whole corporeal world.

As a consequence, we have to reconstruct the explanation from other texts of NIKOLAUS. In the texts of *De coniecturis, De quaerendo deum, and Compendium*, there are a few descriptions relating to the whole corporeal world, but, they are only fragmental and so they do not give us sufficient keys to decipher NIKOLAUS’ whole corporeal world construction.

Then, though pre-dating NIKOLAUS by 200 years, ROBERT GROSSETESTE’s concept of the whole corporeal world, “the world of beings having extension, whose unique formal cause is the ONE PRIMORDIAL LIGHT of *Genesis, chapter 1*”, coincides in its details with those fragmental descriptions above regarding the construction of the whole corporeal world of NIKOLAUS.

Especially, Grosseteste’s concept of MATERIA PRIMA. MATERIA PRIMA, although having no extension in itself, is made into MOLES. that is into the atoms having extension, by “infinite self-multiplication which follows the infinite self-multiplication of the PRIMORDIAL LIGHT” of *Genesis, ch. I*, at the beginning of creation. MOLES can be understood as the same thing as NIKOLAUS’ RES. If the identification of GROSSETESTE’s “MATERIA PRIMA made into MOLES” with NIKOLAUS’ “RES” is correct, “MATERIA PRIMA made into MOLES” can be the key-concept which enables us to have clear understanding of NIKOLAUS’ whole corporeal world construction.

So we have a way of getting a clear understanding of *De dato patris luminum, ch. II, n. 100*.